
黒き竜

copan

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒き竜

【Nコード】

N7293E

【作者名】

c o p a n

【あらすじ】

どこにでもいる極普通の高校生土屋亮がある出来事をきっかけに竜になってしまった。亮の運命は如何に！？これは人間界、魔界、竜界の三つの世界を通しての物語です。この小説はモバゲー小説で自分が書いているものを転載したもので「修正されたものが見たい！」「先が気になる」という方はそちらを御覧下さい。お知らせ。現在、第四章を修正中です。

16年前地元の河原で亮の母親と見られる女性が亮を守るように抱え込んだまま亡くなっていた。

（当時、亮は1歳。名前は身に着けていた物より判明）。

それから土屋家の老夫婦に拾われたが去年、2人一緒に散歩していた所に乗用車が突っ込み亡くなった。

そして現在、亮は国からの生活保護とバイトで生活をやり繰りしていた。

亮は朝飯を作りいつも通りの時間に家を出る。

『いつてきまゝす。』

亮の言葉が家に虚しく響き渡る。

去年までは少なくとも「行つてらっしゃい。」と言ってくれる義母がいたが今は誰もいない。

亮はこれから家から5kmくらいの離れた所にある公立高校に自転車で向かう。

外は暑く自転車を少し走らせるだけで汗が出る。

亮は学校に行く途中にあるコンビニに寄った。昼食を買う為だ。
(涼む為でもある)

亮がパンにするかそれとも冷やし中華にするか迷っていると後ろから声を掛けられた。

「おう、亮！おはよう、今日も昼飯の事で悩んでいるのかい！？」

こいつは亮の友達の浩治だ。いつもこの時、この場所で会う。口調から分かるように常にハイテンションだ。

『うるせーなー。そうゆうお前こそ何でこんな暑い日にカップラーメンなんだ？』

浩治の手には会計を済ませたカップラーメンが握られていた。しかもカレー味。

「俺はいつも燃えているからだぜい！」

『そうかい。そうかい。』

浩治の意味の分からない言葉に亮は呆れながら冷やし中華を手に取りレジに向かった。

亮と浩治はコンビニを出て一緒に自転車で学校に向かった。

亮達に通っている高校は公立の進学校だ。

亮は学校では、おとなしく親しい人以外はあまり喋らない。

成績は真ん中くらいで運動能力は良くも悪くもない。

容姿は良く女子からは結構モテるのだが皮肉な事に彼は気付いていない。

因みにクラスは2年A組の理系クラスだ。

浩治は亮と同じクラスで体育では学年1、2を争う実力者だが成績は体育以外は2ばかりで2年で最も留年する確率が高い生徒だ。

性格は前に述べたように常にハイテンション。

初対面の人とも一瞬で友達になれるような奴だ。友達は星の数のようにいるが特に親しいのは亮、拓海だ。（拓海についてはまた後ほど）

容姿は悪くないのだからあまりにも五月蠅いので女子からは嫌われている。

亮達は学校に着くと自転車を駐輪場に置き教室に向かった。

～～～教室～～～

担任「……………以上で朝のホームルームを終わりにする。解散!」

ホームルームと1時限目の間に10分間の休憩時間がある。

解散と同時に浩治が近付いてくる……………と思ったなら浩治は亮をスルーして亮の隣りの席の拓海に話しかけた。

「数学のプリントの宿題写させて」

浩治はいつもの調子で拓海に頼み込む。

「…ったく。お前たまにはちゃんと宿題やって来い!」

遅くなりましたがここで拓海について書きます。

拓海は亮と同じ高校に通う亮と同じクラスの生徒で学年トップの成績の持ち主。

そして勉強以外にも勘や推理力も長けている。戦略ゲームでは負けたことがないらしい。

友達は少ないがその友達とは強い信頼関係で繋がっている。

亮、浩治、拓海はいつも一緒に行動している。

10分間の休憩が終わると1時限目の古典が始まる。授業は1日50分×7時間ある。

因みに今日の予定は1時限目古典、2時限目物理、3時限目現代文、4時限目数学、5時限目現代社会、6時限目化学？、7時限目英語だ。

亮はこの7時間ずっと睡魔と闘っていた。

拓海は7時間ずっと集中して授業を受けていたようだ。

それに対し浩治は7時間睡眠学習。

1時間過ぎる度にたんこぶを1つつ増やしていった。本人曰く寝ている間に各教師の手と本人の頭とが接触したらしい。

帰りのホームルームが終わり皆が帰り始める頃、浩治が亮達に通学バックを担いで近付いて来た。

「よっ。帰ろうぜ！」

浩治は授業中ずっと寝ていたので眠気もなくスッキリした声で言った。

『ふぁ？ああ。帰ろう。』

亮は欠伸をしながら言った。

「おう！帰ろう。」

拓海は常に授業中集中していたにも関わらず疲れたような顔をしていない。

拓海曰く

「だって学校の授業って面白いじゃん。昨日まで知らなかった事が分かるようになるんだぜ？ 疲れる訳ないだろう。」

だそうだ。

浩治は勿論、亮も拓海の気持ちを理解出来なかった。

帰り道。

亮達3人組は話しながら帰っていった。浩治が一方的に話しかけて来るだけだったが…。

そして、大きな十字路で互いに別々の道を進み家に帰って行った。

亮は2人と分かれると自転車を走らせ家に帰った。

家に帰るとすぐに私服に着替え家を出てまた自転車で近くのコンビニに行った。

買い物をするため…ではなく時給850円のバイトをするためだ

亮はこのコンビニで16時から20時までの4時間バイトしている
夕飯は捨てる弁当をこつそりと……。

まあ、店長にもう既にバレている。因みに今日の亮の夕飯はまたも
や冷やし中華だった。

バイトを終えて家に帰ると風呂に入ってゴロゴロして勉強して寝る。

これが亮の日常だ。亮はこの日常は壊れまいと思っていた。

たが、そんな日常はある突然の出来事で崩壊した。

第二章：日常の崩壊と覚醒

くく翌日くく

亮はいつものように学校が終り家でゴロゴロしていた。今日は夏休み前で帰るのが早いのだがバイトは入っていない。

『あゝ暇だゝ。』

『散歩でもするか』

という訳で出かける準備をする亮。

外に出ると亮に熱波が襲った。

『あぢゝい』

今日の最高気温は34度しか今は2時で今が最も暑い時間帯。つまり今、外の気温は34度である。

「地球温暖化のバカ野郎」

亮が心の中で叫ぶ。

「散歩するのやめよつかな。でも、もう外に出ちゃったし家にも暇だからな。バイト入れてれば良かったな。」

亮がバイトを入れてなかった事を後悔していると...

『...ん?』

「今のはなんだ?」

亮の目の前にある山の山頂に一瞬青い空から黒い光が伸びた。

「暇だから行ってみるか…」

亮は山に向かって歩き始めた。

その山は、魔鬼山。
地元の人達は化け物が出る山として昔から恐れられており近づく人はあまりいなかった。

亮達はそれを狙って小学時代に山頂に秘密基地を作ってよく遊んだものだった。

亮が魔鬼山の根元に来るとがらりと風景が変わった。

木々が生い茂り空からの光の侵入を防ぎ真っ昼間だというのに辺り

は夜の様に暗く、山から冷たい空気が流れ込む。

亮は夏だと言うのに寒気を感じた。

「よくもまあこんな所で遊んだものだなぁ。」

亮は内心驚いていた。

「さてと、行くか。」

亮は暗い森に入って行った。

昔の遊び場だったので頂上までの道は分かっている。

魔鬼山はそんなに大きな山ではないどちらかと言うと小さい方である。

頂上までは獣道に沿って歩いて行けば20分ぐらいで着く。

亮は暗い獣道を歩いて行く。

「気味が悪くなければ真夏の居場所として最適なんだけどな。」

今にも化け物が出そうな雰囲気である。

亮が歩く事20分。亮は頂上に着いた。

頂上は亮の頭の中にあつた頂上とはかなり違っていた。

頂上にあつた筈の太木は何が起こったのか黒い不気味な炎を上げて燃えており、その太木から半径5m以内の草花は焼き払われていた。

亮はその光景を見て立ち尽くしていた。

『…何で…』

「これはさっきの黒い光のせいなのか？そもそもあれは何なんだ？」

亮は少し後退った。“ 此処にいては危険だ” 亮の第六感がそう告げた。

この場を立ち去ろうと振り返ると3頭の狼…いや狼に似た化け物が亮を睨み付けていた。

亮の前に現われた3頭の化け物は、狼よりも一回り大きく、目は血の様に赤い、長い犬歯をもち、毛の色はダークブルーで亮に対しものすごい殺気を出して今にも飛び掛かって来そうだ。

亮は今までにない恐怖心を覚えた。

そして、次の瞬間3頭の内の1頭が亮に飛び付いてきた。

亮は咄嗟に避け首をやられるを防いだがその代わり右腕を噛まれた。

亮は腕を振り化け物を引き剥がしたが腕からは激痛と伴におびただしい程の血が流れた。

「殺される…」

亮は自分の死を悟った。

その時、亮は身体の中で何かが開かれるのを感じた。それと同時に身体が焼かれる様な激しい痛みが全身を襲った。
『ぐあああああ』

亮はあまりの痛さに立ってはいられず倒れこんだ。

今は意識を何とか保っている。

ふと手を見ると人差し指と中指、薬指と小指がくつつき爪が鋭く尖ってきている。

その時になって亮は自分の身体の変化に気付いた。

身体中の皮膚は黒く変色し硬くなり鱗の様なものがでてきた。手と同じような変化が足でも同様に起き、身体が引き伸ばされる感じがした。変化は頭部にまで及び、顎が前に伸び顔面が変形していった。

亮が倒れ込んで3分。ようやく身体中の痛みが引いた。

亮が声を発した次の瞬間、先程遠吠えしたウルフ（リーダー？）が地面を後ろ足で蹴る同時に他のウルフも亮に迫って来た。

亮は翼を使って飛んで逃げようとしたが、まだ身体を上手く動かす事が出来ず。飛べなかった。

そんな中、10頭のウルフは亮にどんどん迫って来て一斉に噛み付いた。

10頭の内の4頭は亮の長い首に噛み付き、3頭が腹部、残りの3頭は手や足に噛み付いた。

「終わったな。」

亮は自分の命の最期を悟った。

だが、

亮は全く痛みを感じなかった。

確かに噛まれたという感じはあるのだが、痛くも痒くもなかった。

そう、ウルフ達は確かに思いっきり亮に噛み付いたのだが、亮の鱗が鋼のように硬かったので全くダメージを与えられなかったのだ。

ウルフの中には硬すぎる物に対して全力で噛み付いたばかりに牙が折れてしまう者もいた。

亮はそんな哀れなウルフ達を見て闘志が沸いて来た。

「勝てる！」

亮はウルフ達に対し反撃に出た。

再度、攻撃に出たウルフを亮は片っ端から鋭い爪で引き裂いた。

飛掛かったウルフ達は、縦（横）に真っ二つにされる者、首が飛ぶ者、辛うじて前足だけが飛ぶ者等で辺りはウルフの血で赤く染められた。

そして、亮が反撃に出て1分と経たない内に10頭のウルフは全滅した。

ウルフを倒したあと亮は疲れてその場で寝てしまった。

くく夜くく

『ふぁー』

魔鬼山山頂で亮が目覚める。

『あれ？此処は？』

亮は何かを思い出し慌てて自分の身体を見渡す。

亮はドラゴンから人間の姿（声）に戻っていた。

『夢………』

と、言いかけ辺りを見渡すと周りにウルフの残骸があり蠅がたかっていた。

『じゃなかったか。』

亮が立ち上がろうとすると

『つつ』

右腕に激痛が走った。

右腕を見ると血は止まっているもののウルフに噛まれた痛々しい傷跡があった。

亮は家に帰ると先ず風呂に入った。

竜化した時程ではないがまだ皮膚が硬い。そして筋力、視力、聴力、嗅覚など身体能力が格段と向上していることに気付いた。

風呂から出ると負傷した右腕に包帯を巻き、夕食を作ることにした。

一応、一年間一人暮らしをしているので飯を作ることは慣れている。

だが、猿も木から落ちる。という言葉がある様に、利き腕の負傷の為に手元が狂い包丁で指を少し切ってしまった。

だが不思議な事に痛みは感じず出血もしなかった。

亮はちょっとした好奇心で包丁で傷をもつと深くしてみた。流石にその時は痛みと伴に出血もしたがその時亮は驚くべきものを見た。

（血が…青い…）

亮が見たものは人間のものとは違う青みを帯びた血だった。

この時亮は再び

“自分はもう人間ではない。化け物だ。
”
という絶望感が湧き上がった。

亮は血を流し落とし暗い表情で調理を進めた。

1時間後

やっと夕食が完成した因みにメニューは、野菜炒めと味噌汁、白米だ。

料理が終わった時には先程の切り傷は初めから無かったかの様に消

えていた。

「この分じゃ腕の傷も明日までに完治してるかな。」

亮は完食するとそのまま眠りに就いた。

くく朝くく

『うん。ふぁー!。』

亮は伸びながら欠伸をした。

『さて今日は終了式か。明日からなつや…』

亮は眠たい目を擦りながら時計を見て固まった。

『遅刻するー!』

時計の針は8時を指していた。

亮は昨日の疲れの為かいつもより2時間起きるのが遅かった。

亮は10分で身支度し（勿論朝食抜き）

家を飛び出した。

「ヤベエ。もうこれは遅刻だな。終了式の日に限って遅刻なんて最悪だな。」

亮は自転車に乗ろうとするとある事を思い付いた。

『やってみるか…。』

亮は通学バックを担いで家の裏にある雑木林に入った。

そしてそこで竜化した。

『グルルルルルル』

亮は喉を鳴らした。

竜化する感覚は何となく分かっていたから難なく竜化できた。

そして大きな翼をばたつかせてみせた。

「昨日は身体が上手く動かさなくて飛べなかったが今回は飛べる筈
…」

すると足が地面から離れるのを感じた。

「よし！飛べた。」

亮はそのまま後ろ足でバックを掴み急上昇した。

人目に見られないようにするためである。

もし、高校の通学バックを掴んだ竜が飛んでいたところなんか見られたら世間は大騒ぎするだろう。

今日は幸い所々曇があり、亮は雲に隠れながら高校目指して一直線に飛んだ。

高校の裏には裏山がある亮はそこに降りるつもりだ。

飛び立ってから5分後。

亮は学校の裏山上空に到達し、そこからほぼ垂直急降下した。亮は難なく着地に成功し竜化を解いて学校に直行した。

校門に差し掛かると誰かに呼び止められた。

「おい土屋。何でお前はこっちから入る？お前はいつも西門からだろ？」

声の主は担任の先生だった。

「ああ。そういえばこの先生、東門担当だったけ。」

『えっ！？ああ。ちよと道に迷っちゃて…』

思いつきり目が泳いでいる。何て嘘をつくのが下手なんだろう。

「嘘つけ！それにお前自転車通学だろう？
まあいい。おはよう。」

『おはようございます。」「ふう。何とか誤魔化せた。」』

昇降口に行くと浩治に会った。

『おはよう。』

「おう！おはよう亮！-！」

やっぱり朝からハイテンションの浩治。

「亮。さっきさ〜。。。」

浩治が何か言いかけた。

『なんだ？』

「さっき学校の裏山に何か黒い物が落ちるの見なかったか？」

ギクッ！

「こいつ、見てたのか。」

『い、いや。見てない。』

「そつか。俺が見た時も周りの奴に聞いてみたけど、みんな見てなかったみたいだし俺の見間違いか。」

浩治は溜め息を吐きながら言った。

浩治は教室に戻ってから他の人に浩治は自分が見たものについて聞いていた。

だが、みんな知らないと言っただけだった。

「あつ。それ俺も見た！」

ビクッ。

僅かに亮の体が反応した。

その声は拓海のものだった。

「マジで！？やっぱ見間違えじゃなかったんだ。」

「今日、学校終わったら、行ってみない？裏山に」

人一倍に探求心がある拓海が言った。

「おう！俺も気になるしな。
亮はどうする？」

『えっ！？ああ、行くよ。』

「どうせ行っても何も見つからないだろう。」

キンコーンカーンコーン

担任「じゃあ、夏休み明けにまた会おう。解散！」

みんなが一斉に帰り始める。

そんな中、拓海はかなり暗い表情をしている。

『おい拓海。どうした？気分でも悪いのか？』

「体育が……体育が……。」

拓海が震える声で言う。

「体育がどうしたんだ。」

浩治が尋ねた。

「って、お前いつの間に。」

「体育が……4……。」

「はあ!？」

亮は声を裏返しながら言った。

すると拓海は、先程個別に渡された成績表を亮達に見せた。

現文5、古文5、数5、英5、5、5、…体育4…学年1位。

『スゲエ…。』

亮の平均は3.8である。

「なにがスゲエだ。悔しいじゃないか！こいつに少しでも近付いたことが…。」（前はオール5）

拓海が指した指の先は…

浩治だった。

『なるほど。』

亮も納得した。

「そこ納得するなよ」

浩治 or z

因みに浩治の平均2・1。(体育以外オール2。学年最下位)

『大丈夫だよ。それでも学年1位なんだから学年最下位のこいつに

最も遠いんだぜ?』

拓海を慰める亮。

「そっか。そうだよな。」

立ち直ろうとする拓海。

「そっだよ。体育“以外”は俺に勝っているんだからいいじゃないか。」

orzから立ち直り、慰めてるつもりの浩治。

『ばっ、馬鹿。今それを拓海に言ったら…。』

浩治は慰めたつもりだったらしいが拓海は別の意味で受け取ってしまったようだ。

拓海はどこから出したのか。カッターの刃を出し刃を自分の首に当てていた。

『まっ、待って拓海！早まるな！』

亮は正直焦っていた。

『こいつが体育で5が採れるのはいつも体育以外の授業中寝ていて俺たちより体力がある状態で体育の授業を受けているからだ。』

別にお前が浩治より下と言う訳ではない！』

亮は必死に弁論した。

「そつえば、さっきから俺、侮辱されているのは気のせいかい？」

ここで浩治がKYな発言。

『You shut up!』

「何だろう？目から汗が……」

浩治再び orz

『まあ。とにかくそのカッターはしまおうぜ?』

「ああ、分かった。」

拓海は了承し、首元からカッターを離した。

「ふう、これで一件落着だな。」

『さてと、帰ろっか?』

亮がバックを担いで帰ろうとすると、

「「待ていゝ！」」

浩治と拓海に呼び止められた。

『なにか？』

「裏山行くの忘れてるぞ！」

さっきの態度は何だったのか拓海はいつもの表情で言った。

「チッ、覚えていたか…ってゆうか、切替え早っ」

『そ、そうだな。じゃあ、行こっか？』

3人は学校の裏山に向かった。

浩治、拓海は自転車に跨る「マタガル」。

「おい、亮！今日お前自転車は？」

そつえば、今日東門から来てたよな？」

浩治が尋ねた。

「こんな質問、朝誰かに聞かれたような？」

『いや、朝自転車の鍵なくして持って来れなかったんだよね。』

そして走って来てたら、道に迷っているお婆さんがいたから親切に道案内してたら東門から入る事になっちゃった。』

相変わらず下手な嘘。

「おい。嘘バレバレだぞ」

拓海が言う。

「流石学年トップ。まあ、こんな嘘誰にでも暴けるか。」

「えっ！？さっきの嘘だったの！？」

「訂正。馬鹿には無理。」

『まあ、そんな事いいとして早く行こうぜ。』

「ああ、そうだな。」

学校の裏山は東門を出てすぐ目の前にある。別に自転車があってもなくてもそう変わらない。

〳〵裏山山頂〳〵

「おかしいな。確かにここに辺に落ちたと思ったんだけどな。」

浩治達が見たと言う巨大な黒い物体を探し始めてかれこれ2時間。浩治が溜め息を吐きながら言った。

浩治が諦めようとした時、拓海があるものを見つけた。

「おい。これ見てみるよ。」

拓海が見つけたものは、

足跡だった。

その足跡かなり大きく、最初見つけた位置から5、6歩学校の方に続いたあと消えていた。

亮にはその足跡が何なのかすぐに分かった。

何故なら、

それが自分の付けた足跡だからだ。

亮は朝、竜の状態で裏山に着地し竜化を解くまでに数歩あるいた。竜は巨大で足も大きい。よって、体重も10t位ある。だから、足跡がついた。

「足跡の大きさにかなりでかいなあ。重さも数tはあるだろう。もしかしてこれが朝裏山に降りたやつか？」

「流石は拓海。その推理は当たっている。だが、いくら拓海でもその生物が竜だという事には辿り着かないだろう。」

『なあ、もういいだろ？帰ろうぜ。もう手掛かりは無さそうだし。』

「うーん。そうだな。」

やっと拓海が了承した。

それから亮達は山を降りそれぞれの家に帰って行った。

くく帰り道くく

家へ歩いていると前から3人組の男達が歩いて来た。

亮が無言で通り過ぎようとすると、くく、

ドン

3人組の男の内の一人とぶつかった…
というよりぶつかって来た。

亮はぶつかった衝撃でよろめいた。

「いつてゝな。何するんだよ糞餓鬼があ！」

最初は謝ろうとしたが“糞餓鬼”という言葉でその気は失せた。その場で亮は黙って通り過ぎようとした。

その時、後ろから殺気を感じ咄嗟に後ろを振り向いた。すると先程の男が拳を構え殴り掛かって来た。

だが、

何故か亮にはそれがスロー再生している様に見えた。亮は当然の事ながらそれを躲した。

「うお、スゲエ。」

前にも述べたが初めて竜化した時から亮の身体能力は格段と向上している。だから、男の拳が遅く見えたのだ。

男は更に攻撃を加えるが亮はそれを全て躲した。

途中から、他の2人も参戦して来たが亮は言つまでも無いが、それを全て躲す。

男は相当頭にきたのか懐からナイフを取り出した。

「殺す気ですか？」

余裕な顔で亮が言う。

「ああ、殺す気だ。
死ねええええええ！」

男は狂った様にナイフを振り回し始めた。

これに対し亮は焦らず反撃に出る。

男が切り掛かった直後の隙をつき男の腹に一発入れた。

「ぐはっ！」

亮は軽く殴ったつもりだったのだが男は約3m程飛んだ。

その男はそのまま泡を吹いて気絶した。

それを見た残りの2人は顔を真っ青にしながら気絶した男を置き去りにして逃げに行った。

『ふう〜。』

亮は一息吐きそのまま帰途についた。

〜亮の家〜

『ただいま。』

亮はリビングのソファで横になる。

『暇だね。』

亮が伸びながら言う。現在は4時今日は5時からバイトがある。バイトには30分前に家を出ればいいから30分間暇である。

亮にとって30分時間が余ると言うのは結構退屈である。亮はゲームや漫画は一切持っていないく、30分だから昼寝をしようにもしにくい。

結局亮は、何もせずただソファに横になりながら携帯をいじっていた。

30分後

「よし、じゃあ行くか。」

亮が家を出ると何故か倉庫に目が止まった。

「そういえば、あの中なにが入っているんだろう？」

今まで亮はその倉庫の中身を見た事が無かった。

別に義母や義父に開けるなと言われたからではない。それまでその倉庫に全く興味を抱かなかったからだ。

「明日、倉庫掃除も兼ねて開けてみるか。どうせ暇だし。」

亮は自転車を引っ張り出し自転車に乗ってバイト先のコンビニに向かった。

第三章：竜界と真実

くく翌朝くく

『ふああああ。』

亮は欠伸をしたがら目覚めた。

「今日から夏休みか」。暇だな。

そつえば今日、倉庫の掃除するんだっけ？」

亮はそのことを思い出すと。眠たい目を擦りながら起き上がった。

服を着替え、朝食を済ませると亮は倉庫に向かった。

倉庫の扉を開けようとするど、

『…………あれ？』

扉には鍵は掛かっていないのだから暫く開けていなかった為か少し動いただけだった。

仕方がないので家から太い鉄の棒を持ってきて梃子の原理を使って扉をこじ開けようとした。

だが扉は、なかなか動かない。

亮が全力で開けようとすると、

ガチャーン！

バキ！？

扉が開いたと同時に直径3cm位ある鉄の棒が折れた。亮はその折れた勢いで前に吹っ飛んだ。

「こんなに太い鉄の棒が折れるって俺どんだけ怪力なんだ？
つか、鉄なんだから折れるんじゃないかって曲がるだろ作者あ！」

心の中で作者にキレる亮。それをスルーする作者。

まあ、とにかく亮は倉庫に入ってしまった。

中に入っていたのは、義父が昔使っていたと思われるゴルフの道具や義母が若い頃買っておいて途中でギブアップしたダイエツト食品（賞味期限20年過ぎている。）

……などガラクタしか入っていなかった。

亮が倉庫を整理していくと何やら変わった本（ノート？）を見つけた。

その本には亮が今まで見た事のない字がづらづらと綴「ツヅ」られていた。

しかし、亮が見た事のない筈の字なのに何故か亮にはそれを理解する事が出来た。

亮は本に書いてある一つの単語を何も考えず口に出してみた。

『ムーヴ…』

その時、亮は急に身体が重くなるのを感じた。

すると、一瞬目の前が真っ白になり、気が付くと亮は薄暗い倉庫から雲一つない草原に立っていた。

「あれ、ここどこ？俺もしかして死んだ？じゃあ、ここは死後の世界？」

亮が呑気にそう思っていると、

「匂いがする。何か近付いて来るなあ。」

亮が感じ取った匂いは、人間の匂いでも犬の匂いでもなく何となく少し自分の匂いに似た匂いがした。

「とにかく隠れよう……って無理か。」

辺りは草原。隠れる所などない。

暫くすると亮が眺めていた方向の空に黒い小さな点が見え始めた。

その点はどんどん近付いて来ると同時に姿形がはつきりしていった。
それは、巨大身体と翼、鋭い爪、迫力のあるオーラ。

そう、それは

ドラゴンだった。

そのドラゴンは亮の目の前に降りた。

『死後の世界にはドラゴンがお迎えに来るのか……変な話だな。』

【死後の世界？ここはそんな所ではありません。ここは竜界ですよ。因みにリヨウ様がおられた世界は人間界と読んでいます。】

その声は音として聞こえたのではなく、直接頭に入ってきた。また、その声も暗号じみた言葉で、少なくとも日本語ではなかったが自分には理解できた。自分も竜だからであろうか。

『竜界？』

【はい。

竜界は我々竜族、竜王様であられるギガ様が治めておられる世界です。この世界には人間はおりません。

他にも人間の他、魔族がいる魔界もあります。リヨウ様の母方様、マリア様は魔界出身であられました。】

『ふーん、そうなんだ。

ところでさっきから気になってたんだがなぜ俺の名前を知ってる？しかも、なぜ敬語？』

亮は異世界に来たという事実にはあまり驚いていないようだ。

【竜王様のご子息の名前を知らない訳ないじゃないですか。匂いも竜王様のものと似てますし。】

その竜は微笑みながら言った。

『はい！？という事は俺の親父って竜、しかもその長なのか？』

亮にとってそっちの方が驚きだったようだ。

【はい。ですからあなたには今、竜王様でおられるギガ様と偉大な魔導師であられたマリア様の血が流れておられます。

……っあ、そうだ。リヨウ様、我々はここで立ち話をしている場合ではありません。

わたくしはこれから竜王様のお言付けによりリヨウ様を竜王様のところへお連れします。話は飛びながらお願いします。

ええっと…竜にはなれますか？】

竜は心配そうな顔で聞いた。

『ああ。まだぎこちないけど飛べるぞ。』

亮はそう言って竜化した。

【では、行きましょう。】

その竜が飛び立つと亮も後に続いて翼をばたつかせて飛んだ。

【そういえば、君の名前は？】

亮はまだ名前を聞いていなかったことに気が付いた。

【あつ、私としたことが…】

私の名はジヨゾです。今後リヨウ様のお世話をさせていただきます。】

ジヨゾは焦りながら言った。

【おう、よろしくな！】

取り敢えず挨拶をする亮。

【宜しく願います。】

【さっきの続きなんだけど、何で今まで俺は人間界にいたんだ？】

ジヨゾの顔が曇った。

【それは…】

【それはリヨウ様がまだ赤児だった頃、

当時、竜界にいたマリア様が急遽「キュウキョ」人間界に赴くことになりリヨウ様を連れ人間界に行くことになりました。

ギガ様はそのことについて反対しませんでした。もし、あの時ギガ様が反対しておれば……

マリア様はリヨウ様を抱え詠唱しました。】

【詠唱って俺がここに来る時に言った言葉か？】

【リヨウ様がどんな詠唱をしたか知りませんが恐らくそうでしょう。しかし、マリア様はあろうことか詠唱に失敗してしまったのです。時空移転の魔法は滅多に失敗する事はないのですが十億分の一くらいの確率で失敗します。失敗すると確実に死にます。

詠唱に失敗したマリア様は火達磨「ヒダルマ」になりながら移転しました。恐らくその時、マリア様はリヨウ様を何らかの方法で守ったのでしよう。】

ジヨゾがそこまで言うとき亮は目が熱くなるのを感じた。

【そうゆう事だったんだ。】

亮はぼつりと呟いた。

【最後の質問だが俺がこの世界に来る2日前、人間界にある魔鬼山という山に空から黒い光が差したんだ。

そこに行くと辺りの草花が焼き払われて狼みたいな魔物がいたんだが、あれはどういう事なんだ？】

ジヨゾは少し考えてから答えた。

【それはアリステル現象でしょう。アリステル現象とは、魔界と人間界との間で千年周期で起こる現象です。

その現象が生じると一瞬の間ですが魔界と人間界が繋がります。そこにリヨウ様が見たというウルフの群が飛び込んだのでしょう。

これはあくまで私の推理ですが】

【なるほど、そういう事か。】

亮は納得したように言った。

【もう暫くで着きます。】

すると、ジヨゾは徐々に高度を落とし着陸する体制をとった。

亮の前に見えるのは大きな洞窟のある大きな岩山、ジヨゾはそこに降りるようだ。

着陸すると亮の目の前に巨大な洞窟が現われた。

ジヨゾが岩山に着陸するのを見て亮も後に続いて着陸し、ジヨゾは岩山の巨大な洞窟に入ってしまった。

【こちらです。】

ジヨゾはそっぴいながら亮を洞窟の中へと導いた。亮はジヨゾに導かれるままに洞窟を進んだ。

洞窟の中は真っ暗であり、普通の人間であれば何も見えないであろう。

暫く歩いていくと行く手に光が見え、更に歩くと洞窟を抜けた。

洞窟を抜けると周りが岩の壁で覆われた広い広場に出て、空から光が差し込み吹抜けの状態になっていた。そして、中央には大きな樹があり樹の下に大きな竜が寝そべって、しかもその周りにも何頭かの竜がくつろいでいた。

【リヨウ様をお連れしました。】

ジヨゾが叫ぶ。

その声を聞いた真ん中の竜は目覚めて起き上がり、それ以外の竜は慌てて姿勢を正し亮達に頭を下げる。

【おう、久し振りだなあ。元気にしてたか？】

真ん中の竜が尋ねる。

【おう、元気だ。

ところで……………。

あんた、誰？】

亮が平然とした顔で尋ねた。

【おい！父親との再会という、感動的なシーンを“あんた誰”なんかでぶち壊しするなよ！】

真ん中の竜がつつこんだ。

【父親！？ああ、なるほど。

あんたが俺の親父、ギガか。「なかなかキモい親父だな。」】

【キモいとは何だキモいとは。】

「心読術ですか？」

【その通りだ。】

「読むな！」

【…で、何で俺をここに呼んだ？】

【何でって、お前の匂いがしたから。

せっかくこっちの世界に戻れたんだ、父親と再会してもいいだろ？】

【まあ、それはそうだな。】

【強いて言えばお前を鍛える為でもあるがな。】

【どういう事だ？】

【お前は俺の息子そして、第104代竜王候補つまり竜王子だからな。】

【現在ギガ様は第103代竜王であられますから、ギガ様のご子息であるリヨウ様が次の竜王候補と言っ事です。】

ジヨゾが亮に耳打ちした。

ギガが話を進める。

【竜王たる者、力が無ければどうしようにもならん。だから、今日から軍団長であるジヨゾに鍛えてもらっ。】

【ジヨゾ、お前軍団長だったのか。】

亮は驚いて言った。

【はい、軍団長兼リヨウ様の世話係となっております。】

【稽古「ケイコ」って絶対に受けないといけないのか？】

【次期竜王の候補なんですから仕方ありませんね。】

ジヨゾは微笑みながら答えた。

「はあ、仕方ないか。まあ、夏休み中やる事バイトぐらいしかないし別にいいか。ここに居たら金を稼ぐ必要もないし。」

【ああ、分かった。稽古を受けよう。】

亮は仕方ないという感じでギガに向かって言った。

【よく言った。息子よ、頑張れよ。

ジヨゾ、リヨウが死なない程度に鍛えてやれ。】

ギガはにやつきながら言った。

【はっ！

それではリヨウ様、早速稽古をしましょう。】

そういう言つとジヨゾは外に向かって歩き出した。

【あ、ああ。】

そういつて亮はジヨゾについて行った

ジヨゾの後について行くと、洞窟を出て広い草原に出た。ジヨゾはそこで立ち止まった。

ジヨゾは振り返り亮と向かい合った。

【今日は身体的な稽古はしません。今日は我々竜についての講義をします。リヨウ様はまだ自分の事をよく分かっていない様なので…。

】

【分かった。

あと頼みがあるんだが、俺に対して敬語は止めてくれないか？あま
りいい気分になれないのたが……。】

【いいのですか？】

ジヨゾは驚きの表情で亮に確認した。

【ああ。】

亮が頷きながら答えた。

【分かった。じゃあ、これから敬語なしで話そう。】

ジヨゾが早速敬語を省いて楽に言った。

【それじゃあ講義を始めるぞ。まずは竜族の歴史からだ。】

【はい。】

亮が小学生のように生返事をする。

ジヨゾは講義をし始めた。

【俺たち竜族は今から約100万年前に誕生した。そしてその時からこの世界を我々竜族が治め始めその頃からこの世界を竜界と呼んだ。】

「竜族の歴史つてやっぱ長いんだなあ。」

【その頃竜界には、俺たちアリソナ種の竜とゴブサルト種の竜がいて、その2種族間の関係は険悪だった。そして遂に70万年前にアリソナ種とゴブサルト種との間で竜戦争が勃発した。

20万年にも及んだ戦争はアリソナ種の勝利に終わった。戦争を収めたアリソナ種の長、ソウもお前と同じ竜人だったらしい。

それからゴブサルト種の長は一族を率いて魔界に移住する事を決心した。

しかし、一族の一部はまだこの竜界に息を潜めているらしいがな。」

ジヨゾがここで一度話を切った。

【ふ〜ん。それじゃあ、今でもアリソナ種の竜とゴブサルト種の竜は仲が悪いのか？】

亮が質問した。

【ああ、確かに戦争の後和解はしたが仲がいいとは到底言えんな。】

ジヨゾが答えた。

【それじゃあ、今度は使い魔について話そう。

竜である俺たちは魔物に分類される。だが、厄介なことに魔界にいる人間の魔道師は魔物を使い魔にする事ができる。

竜は使い魔として最上位のSクラスの使い魔にあたり、才能のある魔導師にしか召喚できないのだが、現に竜界の竜の約一割は人間と使い魔の契約をしている。もし、契約者が使い魔を必要とする時、その使い魔は最優先で契約者の命令を行使しなければならない。その命令によっては同じ魔族同士、竜族同士と殺し合いをしなければならぬ時もある。】

後半部分ジヨゾは暗い顔で言った。

【そんな……。】

亮は言葉を失った。

「まあ、でも竜の中でも召喚されやすい竜とされにくい竜がある。俺みたいに強い奴やリヨウみたいに竜王の息子みたいな地位の高い竜はまず召喚される事はないだろうがな。それにリヨウは竜人だから対象にはならないかも。」

ジヨゾは表情を明るい顔に変えて言った。

【そうなのか、それじゃあー安心だな。】

亮は安堵の表情をして言った。

その後、亮はジヨゾから竜の寿命は一万年前後だということ、竜の食料や竜の日常生活についてなど沢山の事を教えてもらった。

太陽が沈み、辺りが暗くなってきた。

【……ということだ。

よし、一応必要な事は全部話したから今日のところはこれで終わりで、明日からみっちり鍛えてもらうぞ。明日は早朝から稽古だ。】

この世界には時計という物はない。だから、ジヨゾの言う早朝はどのくらいなのかは分からない。

ジヨゾはにやつきながら言った。ジヨゾの顔からして相当キツい稽古になりそうだ。

【ああ、お手柔らかに頼む。】

亮は少し憂鬱そうに言った。

「そういえばジョゾ、最初会った時よりもキャラかなり変わってねー？敬語を省いたせいかな？」

最初の時よりもかなりドSになっている気がするんだが……」

そう思っている亮も第一章の頃と比べそれなりにキャラが変わっている事に気付く作者…。

亮が洞窟に帰ろうとした時、

【ああ、そうだ。言い忘れてた。】

何かを思い出すようにジョゾが言った。

【何？】

亮はばたつかせていた翼を止めて言った。

【この竜界にいる間は竜化を解くなよ。】

【何で？】

【リヨウはまだ竜に慣れていないだろう？だから。マリア様も苦労しておられた。】

【ふーん、分かった。じゃあ、また明日。】

亮はそう言って頷き、翼をばたつかせて自分の寢床に飛んで行った。言い遅れたが竜界での亮の寢床とジヨゾの寢床の場所は違う。

亮みたいな王族（と言っても亮とギガしかいないが）は先程の安らぎの場（護衛付き）を寢床にしている。
一方軍団長のジヨゾは、その近くの洞窟（護衛付き）を寢床にしている。

亮が寢床の洞窟に着くとそこにはギガがいた。

【おう！愛しき我が息子よ、おかえり〜】

「“愛しき” って… やっぱりこの親父キモい。」

【ああ、ただいま。】

亮の愛想ない挨拶。

愛想ない挨拶だが亮は内心嬉しかった。

人間界にいた頃、1年間亮は家に帰っても独りぼっちで家に帰って挨拶をしても挨拶が返ってくることはなかった。だが、今は多少キモい父であるが本当の家族がいる。家に帰った時挨拶をしてくれる人… じゃなくて竜がいるのだ。

亮はなぜか今までになく心が温まる感じがした。

亮が洞窟に入った時、亮は洞窟の奥にある本の山に目がついた。その内の一冊を手にとってみると亮が倉庫で見つけた本に似た表紙だ

った。

【おい、親父。これ何の本？】

亮は気になったので親父に聞いてみた。

【ん？ああ、それかあ。それはマリアの形見だ。】

【マリア？ああ、母さんのか。で、何の本？】

【知らん。】

胸を張って言った。

「胸を張って言う事じゃないだろ。」

【なぜ知らない？】

【本を見れないからだ】

【なぜ見れない？】

【ページが捲れ「メクレ」ないからだ。】

【何で捲れないんだ？】

【当たり前だろ！俺たち竜がそんな器用な事ができる訳ないだろ！】

つまらない質問に遂に嫌気がさしたのか親父は少々キレ気味に言った。

亮が竜の大きな指でページを捲ろうとしてみるがなかなか捲れない。

「なるほどね。」

人間の指であれば簡単に捲れるだろうが竜の指は力が強い代わりに柔軟性が悪く物を握ることぐらいしかできない。だから本を捲る事ができない、無理に捲ろうとすると鋭い爪で本を引き裂いてしまう。

【仕方ない。】

亮はそう言っ て竜化を解いた。

ジヨゾが体へ異常な負担が掛かると言っていたが、亮にはそれがどうという事がまだ分からなかった。

竜化を解いた亮は早速本を読み始めた。

「やっぱりこの文字か。」

その本に使われていた文字は倉庫にあった本に使われていた文字と似ていた。だから亮には一応、その本に何と書かれているか分かった。

本の1ページ目には“初めての魔導書”と書かれていた。恐らくこの本のタイトルだろう。その本には以下のように書かれていた。

魔力を消費することによって火を創造したり水を創造したりする力の事を魔法と言う。

魔力とは身体の体力、精神力の総和の事であり魔力の高い者は数多くの魔法を使用する事が可能である。

しかし、魔力の消費が著しくなると目眩「メマイ」、疲労感などの体調不良を起こし、最悪の場合死の危険性がある為、常に魔力の消費には十分注意すること。

魔力は食事、睡眠、休養または魔力剤の処方によって回復することが可能だ。

また、魔法には火、水、雷、風、土の五大属性に加え光、闇の特殊属性がある。人間はこれらの七属性の内必ず一つに属する。

（補足：上記の属性の他、五大属性の他特有の魔法が使える無属性が存在するがこれは非常に極稀な者にしか使用出来ない。）……………

というようなことが記されていた。

亮は三時間掛けて第一章まで読むと急に咳込んだ。咳と一緒に血も出てきた。そして、咳込んだ後今度は急に体が重くなるのを感じ目眩がした。

【そろそろ竜化しとけ。もうお前の体が限界だ。】

亮の体調を見た親父が言った。

亮は言われるままに竜化した。すると先程の症状は嘘のように治まった。

「体に負担が掛かるってこつゆつことだったんだ。これじゃあ、母さんも苦勞する訳だ。」

【大丈夫か？】

亮の体調を心配した親父が言った。

【ああ、もう大丈夫だ。】

【そうか。】

親父は安心した様に言った。

【今日はもう寝る。おやすみ。】

【おう！おやすみ。】

亮はそれから深い眠りについた。

第四章 鍛錬

くく朝くく

『グルルルルルル』

亮は喉を鳴らしながら目覚めた。

「朝か、今日から本格的な稽古かあ…」

周りを見るとまだ親父はでかい鼾「イビキ」をかいて眠っていた。
本当にこんな奴が竜王なのかと思えるようなだらしない体制である。

洞窟の外に出ると洞窟を守る護衛の竜は起きていた。

『おはよう。』

「おはようございます、リョウ様。今日からジヨゾ様と稽古ですか？」

今日から地獄の稽古が始まることをもう皆知っているらしい、

『ああ、そうだ。行ってくるよ。』

「行つてらっしゃいませ。頑張つて下さいね。」

『ああ、ありがとう。』

亮はそう言つて昨日の場所に飛んで行つた。

昨日の所に行くともう既にジヨゾがいた。

「遅いぞリヨウ！」

昨日、ジヨゾは早朝から始めることを言ったので亮としてはかなり早く来たつもりだったがそれが遅いと言われたのが亮にとって驚きだった。

『どのくらい待った？』

「かれこれ一時間。」

『それはお前が早すぎるんだろ！』

言っておくが辺りはまだ暗く東の空が少し白けてきたぐらいだ。時間と言うとまだ四時にもなっていないだろう。時

「何を言っている？この時間だと早朝ではなくもう朝ではないか。

王族なら早寝早起きは必須、今ごろギガ様も竜王として必死に働いているじか『ああ、親父なら俺が寝床を出る時まででかい鼾をかい
て寝てたぞ。』」

ジヨゾが話している途中で亮が口を挟んだ。

「……………稽古始めよつか。」

ジヨゾは悔しそうに大きな溜め息をついて言った。

「全ての竜は火属性の技が使える。それに加え水、雷、風、土、闇、
光の六属性の魔法の内いずれかが使える。俺みたいなファイアドラ
ゴンは例外だな。」

「魔法と同じだな」

『どついう風に例外なんだ？』

「後で分かる。話を続けるぞ。」

竜は火属性の技は生きている限り無制限に使用できるが、もう一つの属性には魔力が必要だ。魔力というのは……」

『魔法を使うのに必要な力だろ?』

亮が口を挟む。

「何故知っている?」

ジヨゾは驚いた顔をして亮を睨み付けた。

『昨日、母さんが残した“初めての魔導書”っていう本に書いてあった。』

「そうか、じゃあそこら辺の所は大まか分かるな。」

『ああ。』

「よし、分かった。じゃあ、それなりに手間が省けたという事だ。それじゃあ、実践に移るぞ。」

まずリヨウのもう一つの属性何だが…
ついて来い。」

そういうとジョゾは西の空に飛んだ。亮はそれについて行く。

その時の亮はもう飛ぶ事に慣れておりかなり速い飛行速度で飛べる（600?ノhぐらい）。だが、ジョゾがいうには鍛え方によってはその倍以上の速さで飛べるらしい。

飛行すること20分。

『おい、何処に行くんだ?』

亮が飛びながら聞いた。

「昔、ソウ様が残した種「シュ」の水晶と力の水晶の所だ。」

『種の水晶？』

「着けば教える。ほら、あそこだ。」

亮はジョゾの視線の先を見た。まだ10km位先にあるが巨大な神殿が見えた。

〓一分後〓

亮達はもう神殿に着いていた。

「飛んで行けば10kmなんてあつと言つ間なんだな」

亮は竜の凄さに感心していた。

亮達がいる神殿は石造りになっておりかなり大きい。東京ドーム2、30個ぐらい入りそうである。神殿の門には神殿を警備する竜がいた。

『凄い神殿だなあ、この神殿は竜達が造ったのか？』

「いや、この神殿は70万年前、竜戦争終結時に前にも言った竜王ソウ様が造った……いや、正しくは創ったらしい。」

『どういつ事だ？』

「詳しくは分からない。言伝えによると、ソウ様は“創造の魔法”によってこの神殿を創った。という事になっている。」

『創造の魔法？それって何属性？』

「それが最大の謎なんだ。

“創造の魔法”については全く言伝えとして残っていないんだ。」

『ふ〜ん。』

「ある知のある竜によれば、
彼が竜人だった事から100万年の歴史を持つ竜族でも分からない
“未知の魔法”を使った。
とのことだ。」

『ふ〜ん。そうなんだ。じゃあ、俺も竜人だからその“未知の魔法”
使えるかなあ。』

亮は目を輝かせながら言った。

「さあな、もし使えるとしてもその使い方が分からないんじゃないか
意味がない。」

『そうだよなあ。』

亮は少し落ち込んだ様子で言った。

「ほら、落ち込んでないで神殿に入るぞ。」

『ああ。』

亮達は神殿の中に入っていった。

神殿の内部への入口は一つしかなくこの入口も竜か2、3頭並んでも
余裕がある程のスペースがあった。

亮達は入口から入りトンネルを進んでいった。

進んでいると亮はトンネルの内壁に昔描いたと思われる絵が沢山描いてある事に気が付いた。

亮はその絵を見ていたので当然のことながら歩くペースが遅くなっていた。

「リョウ、歩くペースが落ちてるぞ。しっかり着いて来ないと迷子になるぞ。」

亮の歩くペースが落ちてる事に気付いたジヨゾが言った。

『おーわりい、わりい。』

迷子って言うてもここ一本道だから迷子になる訳ないだろ。』

亮が謝りながら後半つつこみをいれた。

「そういえば、そうだな。」

ジヨゾは微笑みながら言った。

そんな事を言っていると間にも亮達は広い部屋に辿り着いていた。

『ここが目的地?』

「ああ、そうだ。ここでリヨウは属性と魔量いわゆる、魔力の量を調べる。」

この広い部屋にもいろいろな絵が描いてある。

部屋の奥にはぽつんと2つの石の台が置いてあり右側に青い水晶、

左側に赤い水晶があった。

「右側にあるのが属性を調べる“種の水晶”、左側にあるのが魔力を測る“力の水晶”だ。」

まず、“種の水晶”に触れてみる。水属性なら青に、雷属性なら黄色に、土属性なら茶色に、風属性なら灰色になる。」

亮はジョゾに促されるままに“種の水晶”に触れてみた。

だが、何も起こらない。

『何も起こらないぞ。』

「まあ、待て。」

ジヨゾは表情を変えずに言った。

〃〃 10分後〃〃

『いつまで待つのか？』

「…まだまだ」

ジヨゾは微妙に焦っている。

〃〃 30分後〃〃

『あまりにも遅くないか？』

「……ま、まだだ」

ジヨゾが普通に焦っているのが見受けられる。

〳〵一時間後〳〵

『おいジヨゾ、これいつまでやっていいんだ？正直立っているのが辛い…』

と言いかけ振り向いてみると

誰もいない。

ふと視線を下に傾けると…

『って寝てるし…』

ジヨゾは亮の足元で丸くなって音もなく寝ていた。

それを見た亮は無性に腹が立ち…

ドカドカ、ボコボコ、バキバキ、ボキボキ、ドッカーン。

手が塞がっていたので足で思いつ切り蹴ったり、踏んづけたりした。
(最後の方の擬音語は少しおかしかったが)

「ぐは！」

な、何をするんだ。リヨウ！」

ジヨゾは蹴られながら叫んだ。

『それを知りたければさっきまで自分が何をしていたか考えてみる！』

「さっきまで…？」

あ！ああ、悪かったリヨウ謝るから暴力は止めてくれ。」

『うむ。よろしい。』

そう言つて亮はジョゾへの暴行（調教？）を止めた。
『で、これいつまでやってればいいんだ？』

亮はジョゾへの暴行を止めた途端、ジョゾが大きな欠伸をしたので少しイラッとしたが亮はその気持ちを押さえて尋ねた。

「うーん。あれから何時間経った？」

『一時間くらい…。』

「うん。」

ジヨゾは深く考え込んでいる。

『もしかして、俺って半竜だから属性持っていないのかな…。』

亮は自嘲気味に言った。

「いや、そんな事はない。」

あつ、もう水晶から手を外してもいいぞ。」

亮は水晶から手を離れた。

「しょうがない、属性の事は後で考えよう。気を取り直して次は魔力を測ろう。」

『どうすればいいんだ？』

亮は気を取り直して聞いた。

「まず、さっきと同じ様に水晶に手を翳す「カザス」」

亮はジョゾの言う通り赤い“力の水晶”に手を翳した。

「そして、全力で水晶に魔力を流せ。
魔力の流し方は分かるだろう。」

『ああ。』

魔力の流し方は亮が昨日読んだ本に書いてあった。

『ハアアアア！』

亮は水晶に全力で魔力を流した。本では読んだが実際に魔力を流すのは初めてである。

亮が魔力を流すとさっきまで赤かった水晶は一気に青くなった。

ピキ…

「ん、」

ジヨゾは水晶の異常にいち早く気が付いた。

ジヨゾが亮に魔力を流すのを中止させようと声を掛けようとした瞬間……

ピキピキ……パリーン

水晶が割れた…というより内部から爆発した。

亮はその衝撃で後ろに吹っ飛んだ。

幸い堅牢な鱗が亮の体を水晶の破片から守った。

ジヨゾは言いかけた口を開けたまま目の前で起こった衝撃的な出来事に固まっている。

「リヨウ、大丈夫か？」

我に返ったジヨゾは亮な駆け寄った。

「ああ、大丈夫だ。怪我もしてない。」

亮は立ち上がって言った。

「ところで、お前さっき何をした？」

『ジョゾに言われた通り水晶に全力で魔力を流したただけだけど…』

「そんな馬鹿な！」

今まで何万という竜が水晶に魔力を流してきたがあの水晶を魔力で割った竜なんか一頭もいなかったぞ！
ましてやソウ様でもだ。」

ジョゾは興奮しながら大声で叫んだ。

『じ、ごめん。』

亮はジョゾの口調から怒っていると判断した為か、罪悪感を感じ取り敢えず謝った。

「いや、謝ることはない。」

ジヨゾは少し冷静になり言った。

「よし、帰るぞ。ここはもう用済みだ。」

亮とジヨゾは神殿をあとにした。

ジヨゾ：「リヨウ、属性は分からないものの凄い魔力だった。これは将来が楽しみだな。」

ところで“力の水晶”どうするか、担当者にバレたらまた叱られるな。」

亮達は神殿を出て朝の集合場所に戻った。

今はちょうど正午ぐらいである。

人間だったら今頃昼食を取る時間だが、ジョゾが言うには竜は一生飲まず食わずでも生きていけるだから基本的に食事をする習慣がないらしい。

だから亮は、この世界に来てから（竜化してから）何も口にしていない。しかも、食欲が湧かなかった。

『これからどうする？』

朝の場所に戻ってから亮が言った。

「うーん、リヨウのもう一つの属性が分からないけど、火属性の技は使えるだろうからそっちをやろう。」

まずは火属性の基本的な技、プレスだ。」

ジョゾはそう言って大きく息を吸い込み近くの岩に思いっ切り吐き出した。

すると、吐き出したのは空気ではなく蒼い炎だった。

ジヨゾの前にあった岩は見事に完全に溶けていた。

「こんなもんだな。」

ジヨゾは誇らしげに言った。

『スゲエ〜』

亮も何となくどんな技か予想していたが、まさかここまで迫力のあ
るものだとは思ってもみなかった。

「次はリヨウ、やってみろ。」

『いきなりやれって言われても……』

「簡単だ。さっき俺がやったみたいに空気を大きく吸い込む、そしてそれを腹の奥から一気に吐き出す。」

亮は言われた通りにやってみた。

すると、ジヨゾの炎よりは少し赤く小さいものの口から炎を吐き出すことが出来た。

『おお！』

亮は興奮気味に言った。

「うむ。そんなものだ。」

だがまだ少し炎が赤いなあ、もう少し酸素を足す必要がある。

もう少し大きく息を吸ってみる。」

亮は言われた通りにさっきよりも大きく息を吸い込み吐き出した。

今回は威力はジョゾに劣るものの炎の色はジョゾと同じだった。

「よし、完璧だ。〔たった2回でここまで上達するとは…〕」

ジョゾは表情には出さなかったものの内心驚いていた。

『だが、ジョゾのは俺の2倍くらい威力が違うぞ。』

亮は納得いかないようだ。

「それはしょうがないんだ。」

「ファイアドラゴンは他のドラゴンと違って火属性以外の属性が使えない代わりに火属性の技に特化しているんだ。」

だから、威力が違っていて訳だ。」

『ふん。』

「でもリヨウのブレスは平均…いや、それ以上だから練習すればファイアドラゴンのブレスと並ぶかもしれない。」

だから、もっと自分に自信を持っていぞ。」

『本当か！？じゃあ、頑張るか。』

亮は張り切って言った。

だが、ジヨゾは別にお世辞を言った訳ではない。

実際に亮のブレスの威力はファイアドラゴンには劣るが平均を遥かに凌いでいた。

ジヨゾは確信した。

亮はソウ様以来の天性の素晴らしい才能を持った竜だと…

亮はその日、一日中ブレスの練習をした。

そして、練習を重ねることにブレスの威力を増していった。

更に、日が暮れる頃にはブレスの炎の温度調節をこなすようになっていた。

ブレスの温度調節については酸素の量や、腹に入れる力などの沢山

の要素を微妙に調節することによってできる。

この技術は非常に困難なため、一部のファイアドラゴンにしか出来ず、普通のドラゴンとしては亮が初めてだ。

ジョゾでも100年間の激しい練習の末やっと身に着けた技である。

それを亮はたった数時間でこなした。

亮が温度調節のブレスを成功させた時、ジョゾは自分でも100年掛かった技をたった数時間でマスターされたという悔しさのせいか、

「アハハ、アハハハハハハ、アハハ…」

壊れて、ずっと不気味に笑っていた。

そんな感じで一日の稽古が終わった。

だが、亮は寢床に帰ってから竜化を解き。母の魔導書を2時間程読み耽って「フケツテ」いた。

亮は昨日のような症状を心配したが、幸い2時間では問題ないようだった。

亮はその日、基本魔法を覚えていた。（実践はしなかったが）

基本魔法とは属性を問わず全属性で扱える魔法である。

亮はその日の二時間のうちに十個の基本魔法を覚えて寝た。

〳〳稽古二日目〳〳

今日は亮は昨日より遅く起きた。

昨日、ジヨゾと稽古の時間について話し合った結果、流石に昨日は早過ぎたのでこの時間（7時くらい）になった。

亮が昨日の所に行くとやはりジヨゾはもう着いていた。

「よし、来たか。じゃあ、始めるぞ。

昨日、プレスをやったから、今日はファイアボールだ。
上空から見ている。」

ジヨゾは翼をばたつかせて地面から足を離した。

亮もそれに続いて上空に上がった。

そして、空中でジョゾはプレスと同じ要領で息を吸い込んだ。

だが、吐き出したものはプレスではなく、丸い炎の球体だった。

その球体はジョゾの口元で一気に大きくなり、直径3 m程になるとジョゾは炎の球体を地面に向かって吐き出した。

火球が地面に着弾した瞬間、火球が爆発し着弾地点から約半径50 mくらいが炎に包まれた。

この中にいたら例え竜でもひとたまりもないだろう。

亮はあまりの迫力に絶句した。

亮が地上に降りてみると着弾地点から半径50 m以内にあった大きな岩石は全て溶けていた。

「ちょっと、失敗したな。」

ジヨゾは地面に降りたちながら言った。

『これで失敗かよ!』

「いつもはもつといく。風がなければそれよりもいくぞ。今日は、リヨウにはこれをやってもらつ。」

『いや、無理だから…』

亮は自信がないのか最初から諦めている。

「大丈夫だ。確かにプレスよりは難しいがコツを掴めば簡単に出来る。」

まずはプレスと同じ要領で息を吸い込む。これを吐き出す訳だが一気には吐き出さず必ず炎を口元で止めておくんだ。すると口元に火球ができる。そして、火球の中に空気を入れる、そして最後に火球を地面に叩き付ける。」

「一番注意すべき点は中に入れる空気の圧力だ。」

空気は火球を爆発させるのに必要だ。もし、空気圧が低ければ爆発力が小さい。反対に空気圧が高ければ途中で大爆発を起こす。下手すれば死ぬな。」

『死ぬのだけは勘弁だな。』

「安心しろ、今までの統計上この練習で死んだ奴は10人中1人だ。」

『いや、その数値は十分安心できる数値じゃないから……』

「そうか？まあ、リヨウなら大丈夫さ。」

それに最初は空気圧を低くすればいい。それで成功したらベストな空気圧になるまで徐々に上げていけばいいんだから。」

『うん。まあ、やってみるか』

そう言つて亮は空高く舞い上がった。

ジョゾもそれに付いて行く。

そして、亮はブレスの時のように深く息を吸い、口から少しずつ火を吐き出していった。

そして、火球の中に圧力の低い空気を流し込んだ。火球が直径2 mくらいになると亮は火球を吐き出した。

だが、吐き出した火球はジヨゾのように上手くいかず空中で火が消えてしまう始末だった。

それを見た亮とジヨゾは同時に深く溜め息を吐いた。

「やっぱり、最初から成功はしないか。」

ジヨゾは溜め息を吐きながら言った。

亮は完全に気を落としている。

「そう落ち込むなりヨウ。」

これは竜の最上級の火属性の技なんだから……」

『はあ!?!』

亮は驚いた。

『稽古を始めてからたった二日で俺に最上級の技を教えようとしたのか？』

「その通りだ。

だって、普通十年は掛かるブレスもお前たった数時間でマスターしたんだぞ。

しかも、温度調節だって出来たし……」

『ブレスってそんなに難しい技だったのか？』

「ああ、因みにファイアボールはマスターするまで四、五千年は掛かる。火球に空気を混ぜる技術にも千年くらい掛かる。」

『俺って凄くねえ？』

「ああ、確かにリヨウの才能は有り得ない。」

『よし！もう一回やってみよ。』

亮は急に元気を取り戻した。

そして、日が暮れるまで何度も何度もファイアボールの練習に励んだ。流石に成功はしなかったものの最初の頃より格段に良くなった。

日が暮れて寢床に着くと竜化を解いて残りの基本魔法50個をたった2時間で暗記した。

その時亮は自分の記憶力に驚いた。

「俺ってこんなに記憶力良かったんだ。もっと早く気付いてくれ

ば学校のテストも…orz」

つくづく後悔する亮であった。

〳〵稽古三日目〳〵

亮は昨日と同じ時間に起きいつもの場所に向かった。
だが、今日はジョゾはいなかった。

今日は午前中ジョゾは用事があるらしい。
という訳で今日は昼時まで自主練だ。

なので亮は午前中ファイアボールの練習に励んだ。

午後になるとジョゾが来た。

「おい、リヨウ！分かったぞ」

ジヨゾがいきなり興奮した口調で言ってきた。

『分かったってなにが？』

「お前の属性についてだよ。」

『マジで！？』

「ああ、マジだ。

ルーマン様の話から考えるとお前は火、雷、風、土、水属性の五大属性全て使う事ができる。」

『それって無属性っていうこと？』

「無属性の竜なんて聞いた事ないがそういう事になるな。」

『そうか、ところでルーマンって誰？』

「ルーマン様は我々竜族の長老の事だ。竜族の中で最も物知りの竜だ。今年でちょうど15000歳になられる。」

『15000歳？どんだけ長生きなんだよ。』

「確かにな。本人は

20000歳まで生きてやる。

っ
つていているがな。

そっ
つえばリヨウ、お前、魔導書を読んできると言っていたな？」

ジ
ョゾが亮に確認するように聞いた。

『ああ。基本魔法までは全部覚えたが…』

「基本魔法って60個全部覚えたのか？」

ジヨゾは疑い深く尋ねた。

『ああ、結構簡単に覚えられた。』

「普通、基本魔法は人間が半年くらい掛けて覚えるものだぞ。

お前、竜としての才能だけでなく、魔導師としての才能もあるんじゃないか。」

『うーん、そうなのかな。』

亮は少し照れながら言った。

「俺が言いたいのは人間が使う魔法と竜族が使う魔法は同じだっていうことだ。」

『ということは竜化した状態で魔導書に書いてある魔法を使えるってことか?』

「そうゆう事だ。
試してみたらどうだ?」

『ああ。』

亮はその後物体浮游魔法や、空間移転魔法などの基本魔法を実践してみた。やり方は頭に入っていたので難なくこなす事ができた。

基本魔法60個を全てやり終わる頃には日が暮れていた。

一日の稽古が終り寢床に帰ると亮はいつものように竜化を解いてそして、魔導書の残りを読み切った。

実は亮が読んでいた“初めての魔導書”というのは、魔界の魔法学校が一年生の時に一年間を通して使う教科書なのだが、亮はそれを知る由もなかった。

亮はそのまま眠りに就いた。

――稽古四日目――

朝起きて亮がいつもの場所に行くと今日はジョゾだけでなく、ジョゾ以外に他の竜がいた。数は十頭ぐらいだ。

亮が地面に降り立つとジョゾ以外の竜は慌てて亮に頭を下げた。

『今日は竜が集まっているけど何をするんだ？』

亮がジョゾに聞いてみた。

ジヨゾが少し微笑して叫んだ。

「今日はリヨウとお前達でサバイバル戦をやってもらっ。」

『えっ……』

亮は驚いた。

ここに集まっていた竜も何の為にここに召集されたのか知らなかったらしく驚いていた。

『ちょっと待て！俺は訓練を受けてから4日ぐらいしか経っていないだぞ。』

まだプレスぐらいしかできないし……』

「プレスができれば十分だ。」

「ここにいる奴等もそれぐらいしか覚えてないからな。」

『接近戦は？』

「そういえば亮は接近戦、格闘戦の訓練は受けていない。」

「接近戦は…」

「まあ、そこは才能でカバー出来るんじゃない？」

「ジョゾは無責任に言った。」

『いや、いくらなんでもそれは無理！』

「じゃあ、ルールを説明するぞ。」

サバイバルはこれから半径10?以内でやれ。
あとは殺しさえしなければ何したっていい。」

「半径10?以内って言われても分かんねーよ。

しかも、殺しさえしなければって……」

亮はただ一人疑問を持っていたが、他の竜を見る限りサバイバル戦というものに慣れているらしく平然とした顔だった。

「では、俺のファイアボールと伴に開始するその次のファイアボールで終わりだ。散れ！」

その言葉と同時に周りの竜は飛び立った。

亮もそれにつられて空高く飛んだ。

だが、行くあてもなくただ飛んでいるだけだった。

暫く飛んでいると下の方が微かに光った。

「始まったな。」

サバイバル戦が開始されたが付近には誰もいない。

いくら竜が巨大でも上空を含む半径10?に約10頭の竜は少なく開始と同時に会敵することはどの竜荷もなかった。

だが、範囲が広い分、また今日は所々雲があるので奇襲を受けやすい。亮もそれぐらいの事は心得ており、常に周囲を警戒していた。

サバイバル開始から約10分

亮は雲の中を警戒を続けながら飛行していると雲の上に何かがいることに気が付いた。

何かと言ってもこの世界には竜しかいないのでそれが竜、いわゆる“敵”だということが分かった。

敵だということは攻撃しなければならない。

そして、亮はその竜に“奇襲”をすることを決意した。

亮は高度を少しずつ上げ敵の姿を確認した。

敵は竜としては少し小さく青い竜だった。

亮はその竜の真下に行きそこから急上昇をして温度のあまり高くないブレス攻撃を与え気絶させるつもりだ。

亮はその竜の真下にいき奇襲を掛けようとした瞬間、

「ギシャアアアア」

上から竜の悲鳴声が聞こえると同時に亮の真横を亮が目標としていた竜が墜ちていった。このぐらいの高さから落下しても死にはしないだろう。

亮がはっ、と上を見るとさっきとはまた別の赤い竜が飛んでいた。

「恐らくさっきの竜はあの竜に上からやられたのだろう。背中に傷があったし…」

よし、やるか。」

亮は敵を倒した直後の竜は油断していると判断し、直角に近い角度で猛スピードで上昇し雲を飛び出し赤い竜にプレス攻撃をした（勿論、温度調節をしてある）。

亮のプレスは見事に赤い竜に直撃した。

赤い竜は突然のブレス攻撃に驚いたのかそのまま気絶し、青い竜のように落ちていった。

「やった！」

亮は心の中でそう叫び、また雲の中へ急降下した。赤い竜の二の舞を避ける為だ。

亮は再び雲の中に入り下を見た。

地上は所々木が焼けていた。恐らく他の竜のブレス攻撃の跡だろう。

そんな中、二頭の竜が激しい格闘戦を繰り広げていた。その二頭の戦いは激しく、亮はその戦いに参戦しようとは思わなかった。

だが、亮がその戦いを傍観していると後ろから何かが迫って来るのを感じた。

亮は咄嗟に右旋回をした。

そして、次の瞬間…

「っく！」

亮の左腰辺りに弱い痛みが走った。

亮が竜の戦いを傍観している間に他の竜が奇襲を仕掛けてきたのだ。

亮は間一髪でそれを避け左腰を少し擦っただけで済んだ。

もし、攻撃が直撃していたら飛んではいられなかっただろう。

亮に攻撃を仕掛けたのは灰色の竜だった。

「チツ、外してしまいましたか。」

あの攻撃を回避するとはリヨウ様もなかなかやりますね。」

『危なかったがな。』

俺があと少しでも気付くのに遅れていたら今頃地面に叩き付けられてたよ。』

「ハハハハ、確かにそれは残念です。」

その竜は笑いながら言った。

「さて、そろそろ行かせてもらいます。そろそろサバイバルも終わるみたいなので。」

そういつて、灰色の竜は突進してきた。

素人の亮にはこんな時、どのように動けばいいのかわからない。

ただ、相手が突進してきたので亮も突撃した。

そして、両者がすれ違った瞬間、

カキーン

両者の爪が接触し音が甲高く響いた。

亮は反動で一瞬体制を崩した。

だが、灰色の竜はその一瞬の間にターンし、亮の背に接近した。

接近に気がついた亮は体制を立て直し敵の追撃を振り切ろうとした。

そして、亮と灰色の竜との格闘戦の幕が開かれた。

灰色の竜は亮にピッタリついて来ており、時々灼熱のブレスを吐いてくる。

亮はそれを回避するだけで精一杯だった。

亮が上昇すれば相手も上昇するし、亮が宙返りをすれば相手も宙返りをする。

亮は振り切れないと判断し絶望した。

「くっ、終わるまでずっと逃げる事しか出来ないのか。それどころか、終わるまで生きていられるかなあ。」

「そろそろ終わらせてもらいますよ。」

灰色の竜は楽しそうに言っているとグングンとスピードを上げていき亮との距離を縮めていった。

そして、

『ぐあ、
』

灰色の竜の爪が亮の背中を引掻いた「ヒツカイト」。

その攻撃は、この前のウルフのような生温い攻撃とは威力が断然と違い、亮の堅牢な鱗を突き破り青い血と伴に亮の背中肉を引き裂いた。

それでも何とか飛行を維持することが出来た。

「ほう、まだ飛んでいられますか。

それではこれで最後です。」

灰色の竜はにやつきながら再び亮に襲いかかった。

その時、亮はある事を思い付いた。

亮は突然地面に向かい急降下した。

灰色の竜は亮の後を追う。

亮が高度50mくらいを切った時、

亮は地面に向かって一か八かで温度調節をしたファイアボールを放った。

そして、地面への直撃を避けるため急上昇に転じた。

亮の放った直径2mのファイアボールは地面に垂直に落下し、地面に着弾した瞬間、パツと炎が半円状に広がった。

この時、亮は初めてファイアボールを完成させた。

「なっ！」

亮の真後ろにいた灰色の竜はいきなり周りが炎に包まれ視界が真っ赤になった。

だが、その炎は熱くなかった。

灰色の竜は高度10mほどのところで視界が戻り目の前に地面があるのを見て慌てて上昇に転じたがそれは遅過ぎた。

「まずい…」

灰色の竜は垂直直撃を避けたものの地面に滑り込んだ。

灰色の竜は再び飛び立とうとしたがそこに亮が鋭い爪で襲いかかった。

亮は灰色の竜の首筋に爪を当てた。

「くっ、」

『降参したらどうだ？』

「こ、降参します。」

灰色の竜は悔しそうに降参した。

亮はそれを聞いて爪を引っ込めた。
それと同時にサバイバル戦の終わりを告げるジョゾのファイアボールが炸裂した。

『さてと戻るか。』

立てるか？』

亮は灰色の竜を心配し言った。

「はい大丈夫です。リヨウ様は大丈夫ですか？

結構傷が深そうですが…」

『ああ、すっげー痛い。だけど歩けるし飛べるから大丈夫だ。』

亮は痩せ我慢せず正直に言った。

「す、すみません。僕が本気で引掻いたばかりに…」

『いやいや、いいんだよ。』

それよりお前の名前は？」

「僕の名前はテトです。」

『そっかテトか、よろしくな。』

あと敬語は止めてくれよ。』

「いいのですか？」

『ああ、俺はそっちの方がいい。』

「分かった。」

『じゃあ戻ろっか？』

「ああ、そうだね。」

その後、亮とテトは元の地点に話をしながら戻った。

「それにしてもリヨウは凄いなあ。まだこっちに来てから五日だった五日で1000年もジョゾ様に仕えている僕に勝つなんてなんか悔しいな。しかも最上級の技を使うとは…」

テトは飛びながら言った。

「それに加えてまだ格闘戦の訓練を受けてなかったんだろ？

それなのに絶体絶命の状態であんな思い付きが出来るなんて凄いよ。

」

『ありがとう。ってかお前、あいつに1000年も仕えているのか。

』

「まあね、中には4000年、5000年と仕えている先輩も結構いるけどファイアボールを使える竜なんて3、4頭ぐらいしかないんだよ。」

『そうなのか。まあ俺も二日間練習したし、』

「単位と桁が違うよ本来なら4、5000年だよ。」

『そういえばジョゾもそんなこと言ってたな』

「ジョゾ様から聞いてたけどやっぱりリョウは凄い才能の持ち主だねえ」。羨ましい。」

そんなこんな話している内に集合場所に着いた。下には何頭かの竜が集まっている。

『ほら、着いたぞ降りよう。』

亮とテトはそこに降り立った。

周りを見渡すと無傷の竜もいれば全身傷だらけの竜もいた。

「テト」。

突然、人込み…じゃなくて竜込みの中から大声を上げながら一頭の

雌竜が出てきた。

そして、テトに近付いて来た。

「どうだった？ 勿論生き残ったよね？」

その雌竜はテトに近付きながら聞いてきた。

「残念ながら、やられた。」

テトは微笑みながら答えた。

「ウッソー！ 誰に？」

雌竜はかなり驚いている。

「彼に……」

テトは亮を指差しながら言った。

「え？あ！リヨ、リヨウ様……」

「今頃俺の存在に気付いたんかい！

俺ってそんなに存在感ない？」

亮はそんなこと思いながらも雌竜に尋ねた。

『誰？』

「あつ、すみません。私はマナと申します。」

マナは慌てて言った。

『あつ、敬語省いていいから。』

「え、いいんですか？」

『ああ、正直言って敬語は止めて欲しいくらいだ。』

「分かった。じゃあ、普通に話すね。」

「で、本当にリョウはテトに勝ったの？」

『おう、勝ったぞ。背中を負傷したかな。』

「凄い！テトは今回のサバイバル戦に参加した竜の中で一番強かったのよ！」

マナは声を張り上げて言った。

『そうなのか？』

亮はテトに確認した。

「まあな、だが今回のサバイバル戦で一番強いはリヨウになったな。」

「よし、全員集まったな。」

全ての竜が戻って来たのを確認したジヨゾは言った。

「生き残った者は右へ、やられた者は左に寄れ。」

ジヨゾがそう言うのと右側に4頭のグループと左側に6頭のグループに分かれた。亮とマナは右へ、テトは左へ移った。

テトが左へ移ったのを見て亮とマナを除いてみんな驚いている。

「テト。お前、やられたのか？」

ジヨゾはまさかと思いながらもテトに聞いた。

「はい、やられました。」

…リヨウに…」

「「はあゝ！？」」

周りの竜が一斉に驚きの声を上げた。

「まさかお前が…嘘だよな？」

ジヨゾがテトに確認する。

ジヨゾはまだ驚きを隠せないようだ。

「いいえ、本当です。」

テトは微笑しながら言った。

「はあ、リヨウ。お前どんだけ俺を驚かせたら気が済むんだ？」

ジヨゾは溜め息を吐きながら言った。

『今日はあと一回くらいかな』

亮は笑顔で答えた。

「まあ、いい今日はここまで。後は各自で自主練しとけ。リヨウは残れ。」

そついうと周りの竜はゾロゾロとその場を離れていった。

「じゃあなりヨウ」

「じゃあね〜。」

テトとマナが帰り際に挨拶をした。

『おう！じゃあな〜』

亮は挨拶を返す。

「さて、稽古を始めるぞ。」

『ちよと、待った!』

「なんだ?」

『今日はあと一回くらい驚かせるって言ったる?』

ジョゾに見せたいものがある。』

亮はそう言って高く飛び上がった。

「何をする気だ?」

ジョゾは小さい呟いた。

『いくぞ、ジョゾ。空中退避しとけよ。』

「空中退避だと？…まさかな…」

ジヨゾはそう思いながらも空高く舞い上がった。

亮はジヨゾが空中退避するのを確認すると先程の格闘戦でやったように大きく息を吸い口元に直径2 m程の火球を作り放った。

放たれた火球は一直線に重力に引かれながら地面に着弾した。

火球が着弾した瞬間ジヨゾよりは小さいが着弾地点から半径30 mが炎に包まれた。

それを見たジヨゾは驚愕した。

「まさか！ たった二日でリヨウはファイアボールを完成させたというのか！？」

『どうだった？ 今の俺のファイアボール』

亮がジョゾに近付いて聞いた。

「ああ、完璧だ。」

ジョゾは啞然とした顔をしながら言った。

『これはさっきのサバイバル戦で初めて成功したんだ。』

「どっいつ事だ？」

そして亮はテトとの対戦のことをジョゾに話した。

「凄い。リヨウの格闘戦での力量はイマイチだが、戦術的な面では完璧だ。いや、常識を超えている。相手の視界を奪う為にファイアボールなんて…」

まだ、格闘戦について何も言っていないのに…」

亮とテトの戦いのことを聞いてジヨゾは啞然としていた。

『ジヨゾ、聞いてるか？』

「え？ああ、聞いてたとも。

お前の戦術的な面では完璧だ。」

『本当か？』

「ああ。だが、まだまだ力量的な面では欠けている。」

亮はテトと爪が噛み合った時、体制が崩れたのを思い出した。

『そうだよな。』

「と、言う訳で今日から格闘戦の訓練をしてもらう。」

その時ジョゾが不気味ににやついていた。

『魔法は教えてくれないのか？』

亮はジョゾの表情に気が引いたがジョゾに質問してみた。

「それは接近戦が完璧になってからだ。」

それに俺はファイアドラゴンだぞ。前にも言った通り俺は火属性しか扱えない。

リヨウは無属性だから各属性のプロフェッショナルを連れて来ないといけないしな。」

『そうゆう事か。』

亮が納得したように言った。

「そついう事だ。」

じああ、始めようか。」

ジヨゾは再び不気味ににやついた。

その後亮は、飛行訓練、筋トレ（？）、ジヨゾとの練習試合（勿論、力量と経験のあるジヨゾが一方的に亮をボコボコにしていただけだが…）など日が暮れるまでやらされた。

日が暮れる頃には亮は荒息を掻き、全身傷だらけの状態だった。

「今日はこのくらいでいいだろう。」

その言葉と同時に亮は倒れた。

『おい、お前は俺を殺す気か？』

亮は荒息を掻きながら言った。

「殺したら、稽古の意味がなくなるだろ？」

だから、殺す手前までやる。」

『次期竜王の俺にそんなことをしていいのか？』

この時、初めて自分の地位を使ってみた。

が…

「その件に関しては問題ない。」

ギガ様が死なない程度に鍛えてもいいとおっしゃっていたからな。」

『そういえば、そんなこといつてたな。』

クソ、あの糞親父。調子に乗りやがって…』

亮は後半キレ気味に言った。

「ドンマイだ。」

それと今日からこれをずっと続けていくから覚悟しとけよ。」

『はぁ！？』

おい、俺はまだ死にたくないぞ。』

「だから、殺しはしないって。そのうち稽古に慣れるだろ。」

『はぁ、これは帰ったら親父をボコボコにするしかないか。』

そういつて、亮は寢床に帰っていった。

その後、洞窟の守衛の竜によると一晩中ギガの悲鳴が聞こえたらしい…

その次の朝から亮の地獄の毎日が始まった。

だが、ジヨゾの言う通り稽古にはなれてきた。

そして、たまに行われるサバイバル戦でも亮だけで他の竜を全滅させる程の実力が身についていた。

また、他の火属性の技もジヨゾから伝授した。

そしてある日

「ハア、ハア、ハア、ハア」

『ハア、ハア、ハア、ハア』

空中で両者は荒息を搔く。

「僅か二十日間でここまで成長するとは…あと十日もすれば越されるな」

「やっぱり、ジヨゾは強い。あんなに特訓しても勝てない。」

今は亮とジヨゾの練習試合の最中である。十日前までは亮はジヨゾに一方的にボコボコにされていたのだが今は両者共にボロボロである。

「今日のところはこれで終わりだ。」

『ああ、おつかれ』

「おう、お疲れさん。」

『なあ、ソウって何故死んだんだ？』

亮が突然ジヨゾに尋ねた。

「何故いきなりそんなことを聞く？」

『いや、何となく。ふと疑問に思っただけで、どうなんだ？』

ジヨゾは暫く考え込んで答えた。

「……忘れた。」

ルーマン様に聞けば分かるかもしれない。」

『そっか、ルーマンって何処にいるの？』

亮は呆れながら言った。

「知らなかったのか？
いつも“安らぎの間”（亮とギガが再会した場所）にいるぞ。」

『そうか、ありがとう。』

じゃあ今日会って聞いてみるか。

じゃあなジョゾ。』

亮はそう言って安らぎの場の方向へ体を向けた。

「ああ、また明日。」

ジョゾが挨拶を返すと同時に亮は飛び立った。

くく安らぎの場くく

ここ安らぎの場は前にも述べたようにかなり広く、真ん中に大きな樹が生えている。

この樹の下は昔から竜王の特等席だ。
だが、今日は安らぎの場にはギガはいないようだ。

他の竜にとっては日中の居場所となっていて常に多くの竜がここで
昼寝をしたりしている。

その安らぎの場に亮が入ってきた。

竜達が亮の姿を確認すると丁寧にお辞儀をした。

亮はルーマンを探した。

探すと言っても今まで彼に会った事がないのでどれが彼なのか分
らない。

「どいつがルーマンなんだ？」

確かルーマンって長老だったよな。
だから一番年上の竜に聞けばいいんだな。」

亮は周りを見渡すと、年老いてよれよれの竜がまだ若い竜に何かを語っているのを見つけた。

「あの竜かな？」

しかし、現在お取込み中のようにだったので亮は二頭の対話が終わるまで待つ事にした。

〓〓10分後〓〓

若い竜が年老いた竜に深く頭を下げその場を退いた。

「やっと終わったか。」

亮は年老いた竜に近付いた。
近付くと年老いた竜は深く頭を下げた。

それに対し亮も頭を下げた。

『あなたがルーマン様ですか？』

亮は相手が年寄りなので、敬語を使った。

「さよう、儂「ワシ」がルーマンじゃ。

だが、王子であられるあなたがこのような老いぼれに敬語を使うべきでない。」

『分かった。』

亮はすぐに普通の言葉に切り換えたが、多少そのことに抵抗感があった。

「何か御用かな？王子殿。」

『元竜王ソウの死因について聞きたいのだが…』

「ほう、ソウ様の死因ですか、リョウ様も珍しい事をお聞きになりますな。

それは今から50万年前ちょうど竜戦争が終結した頃…」

ルーマンが亮に語り始めた。

「竜戦争が終結した頃、ソウ様は神殿を創ったりして竜界の和平に努められた。

じゃが、数百年が経つとソウ様は魔界に行ってしまった。理由は魔界に平和をもたらす為だと……

その当時、魔界は邪悪な力によって支配されておった。

ソウ様は魔界の善良な心を持つ人間たちと手を組み、その邪悪な力を打ち砕く為に魔界に行かれたのじゃ。

そして、ソウ様は命を掛けて見事邪悪な力を打ち砕かれた。

だが、ソウ様はそれと引き換えに命を落とされた。

と、言う訳じゃ。

これ以上の事は僕は知らん。」

『そうか、ソウはそこまでして竜界、魔界の平和を願っていたんだあゝ。』

俺もソウが造り上げてきた竜界の平和を守り続けたいとなあゝ。』

「リヨウ様、その意気じゃ。
その気持ちを大切にするのじゃぞ！」

『ああ。』

今日はありがとな。』

「うぬ、儂も主に会えて嬉しかったですぞ。」

亮はそれからルーマンに深く挨拶を交わして自分の寢床に飛び立った。

亮が飛び去った後ルーマンは声を漏らした。

「あの方がリヨウ様か…」

あの感じ、いずれ三界（人間界、竜界、魔界）に大きなものをもたらすかも知れん……」

……夜、亮とギガの寢床……

『そうだ！』

亮は突然何かを思い付いたように寢床で叫んだ。

「どうした？」

寝る直前だったのかギガは不機嫌そうに聞いた。

『俺、明日帰る。』

「はあ！？」

ギガはいきなり何の事かと声を上げた。

『だから、人間界に帰る。』

そういえば、そろそろ夏休み明けるんだった。』

実は今日で亮がこの世界にきて34、5日が経つ。だから、そろそろ人間界では夏休みが明けてしまうのだ。

「本当に帰るのか？」

『ああ、俺は向こうの人間でもあるからな。』

「そうか。別に俺は止めない。だが、また帰って来いよ。」

『ああ、明日発つから』

「おう、分かった。自分の恋しい息子がまたいなくなるとは寂しくなるなあ。」

『寂しい気持ちは分かるが“恋しい”は止める。キモい。』

「……………」

『って、もう寝てるじゃん。はや!』

そう言って、亮も眠りに就いた。

実はこの時、ギガは寝ていたのではなく声を殺して泣いていたのだ
った。

くく翌朝くく

安らぎの場には沢山の竜であふれていた。

「本当に行くのか？」

『ああ。』

「また帰って来いよ。」

まだ、属性魔法を教えていないんだから。」

『分かっている。』

「リョウ！」

亮がその声に反応し振り返るとテトとマナがいた。

この二頭とは、初めてのサバイバル戦以来初めてできた竜の友達だ。

「帰って来たらまた相手してよ。僕、それまでに強くなっているから…」

「私も頑張る！」

マナもテトの後に続いて張り切って言った。

『そうか。じゃあ、期待してるよ。』

「リョウ様、人間界に戻っても元気にするんじやぞ。」

『それはこっちの台詞だ。』

俺が戻って来るまでにくたばるなよ。』

「何を言う。儼は20000年まで生きてやるわい。」

ルーマンはカツカと笑いながら言った。

亮はそれに笑顔で答えた。

亮が辺りを見渡す。

周りには亮を送る為に来てくれた竜が沢山いる。

『今日は俺のために皆集まってくれてありがとう。』

俺は人間界に帰る。

だが、一年もしない内に（冬休みに）またここに戻るつもりだ。

その時は、また宜しく頼む。

それでは皆、また会おう。』

亮の挨拶の言葉が終わると周りの竜は雄叫びを上げた。

そして亮がギガ、ジョゾ、テト、マナ、ルーマンに順々に顔を向け、

『じゃあな。』

と、一言いい、この世界に来た時に唱えたように、

『ムーヴ』

と、唱えた。

そして、亮は安らぎの場から消えた。

亮が消えた後ルーマンは誰にも聞こえないように呟いた。

「あやつ、時空移転魔法を使えこなせるのか?…」

と……。

第五章 魔界

薄暗い森の中に突然一頭の黒い竜が現われた。

その黒い竜は姿を現すと同時に一人の少年…亮に身を変えた。

『さてと、戻って来た。』

この暗い森……魔鬼山……じゃないね……

………此所どこおゝ！？』

確かに周りの暗さや雰囲気は魔鬼山に似ているのだが、明らかに人間界には生えていない様な奇形の草木が周りにあちこちに生えている。

すると突然、

「キヤーーーーー!!」

女性の悲鳴が聞こえてきた。

声の聞こえた方向をみると亮と同年くらいの少女がウルフに追いかけている。

「誰か助けて〜!」

少女は走りながら叫んでいる。

亮は竜化して助けようと思ったが、流石に人前に竜の姿をさらけ出すのは不味いので思いとどまった。

亮は一瞬考えた。

「竜を見せるのは不味いか、だからと言って武器は持ってないし…
基本魔法で良いのあったかな」

そくだ！この手でいこう。これなら魔法も何とか誤魔化せるだろ。」
亮は近くにあった大きな岩を魔法で持ち上げ、その岩をウルフに投げ付けた。

その岩はかなり速いスピードでウルフに真直ぐ飛んでいった。

その時、少女が何かにつまずいたようで前に転んだ。

「不味い。間に合え！」

ウルフは少女に飛掛かった。

「キヤアアアアア」

少女が叫んだ。

ドス、、、バコーン！

「間に合った。」

亮は溜め息を吐きながら言った。

少女に飛び付こうと大きくジャンプしたウルフは少女に噛み付く寸前に巨大な岩が激突。

ウルフは石に飛され近くの木に衝突し、しかもそこに巨大な岩が襲ってきたからにはひとたまりもない。

ウルフは木と岩に挟まれ潰れた。

その周りには青い血とウルフの肉が散乱しているだけだった。

少女は目を丸くさせながら岩が飛んで来た方向、つまり亮を見た。

『大丈夫か？』

亮は少女に近付きながら聞いた。

「え！？あ、大丈夫です。」

少女は見た事のない少年に不意に声を掛けられたせいか、ぎこちなく答えた。

『そうか良かった。』

亮は安心し一息吐いた。

「物体浮游魔法ですか？」

『え！？魔法知ってんの？』

亮は相当驚いた。

何故なら、人間界では魔法は架空のものとされているのに自分と同じ年くらいの少女が物体浮游魔法を知っていたからだ。

「馬鹿にしないで下さいよ。私は17ですよ。そのような質問は幼児に言って下さい。」

「ん？17歳で知ってて当たり前？

あれ？もしかして……」

『ねえ、どこって何処？』

亮は不審に思い聞いてみた。

「さっきから何を聞いているんですか？

ここはミース国の首都ラウスの外れの森です。」

「ラウス？どこかで見た事ある言葉だなあ。

そつだ！母さんの魔導書だ！魔導書の裏表紙にラウス魔法学校って書いてあった！

ん？待てよ…と、いうことは此処は魔界？」

『ねえ、変な事聞くけど、此処って魔界？』

「そつだけど…」

少女は呆れながら言った。

亮「なんてこった。人間界かと思ったら魔界かよ。もう一回唱えれば戻れるかなあ？」

いや、また変な世界に飛んだら厄介だ。

しょうがない。ここ、魔界で時空移転魔法の事をよく調べてから帰るか……」

「あゝ。」

少女が声を掛けてきた。『なんだ？』

「さっきはありがとう。」

私の名前はルル。
あなたは？」

『亮だ』

「リヨウか、それにしても変わった服装ね。」

この時亮は人間界の服を着ていたが、ルルは紺色のローブを身に纏って「マトツテ」いた。

「まあ、いいわ。

お礼がしたいから私の家に来る？」

『いいのか？』

「うん、別に構わないわよ。家でご馳走したいから。」

亮は“ご馳走”という単語を聞いて今、自分が今までにないくらいものすごく空腹だということに気付いた。

それもその筈、竜化していたからできたものの亮は35、6日間ずっと飲まず食わずだった。

その状態で竜化を解いたのだから、人間では有り得ない程腹が減る。

『じゃあ、お言葉に甘えて…』

亮は悪いと思いながらもその提案を受け入れた。

「じゃあ、ついて来て。」

亮は少女の後に空腹を我慢しながらついて行った。

『何でルルはあそこにいたんだ？』

「朝の散歩。朝の散歩は私の日課だからね。」

リヨウこそ何であそこにいたの？」

ルルは逆に聞き返してきた。

「ギクツ！ 聞くんじゃないかな？」

どう誤魔化すか、

『お、俺も散歩だ。』

「そう…」

ルルは疑いの目を向けながら言った。

そうこう話している内に亮達は森を抜けていた。

森を抜けると目の前に大きな城門があった。

『スゲエ』

亮は不意に声に出してしまった。

「あなたは本当に此処の住民？」

此処の住民であれば驚く事はないでしょう？」

ルルは疑いの目を向け立ち止まった。

「チツ、鋭いな。」

『仕方ない。本当の事を言うよ。』

俺は人間界から来たんだ。」

「そんな訳ないでしょう。」

異世界に行くには時空移転魔法しかないし…

それに人間界には魔法が発展していないでしょう?」

「くっ、どうするか。」

待てよ、そう言えばジョゾが魔界と人間界では…」

『アリステル現象って言うのを知ってるか?』

「え? ええ、知っているけど……」

もしかして、それに巻き込まれたの?」

『そういう事。』

だから、今までこの森でさまよっていた。」

「そうなんだ…」

「じゃあ、何で魔法が使えるの？」

「向こうの世界は魔法が発展していないんでしょう？」

『母がこっちの人間だったからな。』

「じゃあ、お母様はどこに？」

『母は死んだ。』

「い、ごめんなさい。」

すると、ルルの疑いの目がなくなった。

『いいんだ。それより早く行こうぜ。』

「半分嘘だけど、半分本当だからこれでいいんだよな。」

「あつ、うん。」

二人は大きな城門をくぐり、城下町へと入って行った。

城下町に入ると、市場が催されており飯屋や雑貨屋、武器屋に服屋などの出店がずらりと並んでいた。辺りにはまだ朝だと言うのに人でにぎわっていた。

そんな中ルルは人込みの中を突き進んでいく。

亮は人込みを掻き分けながらルルのあとについて行くだけで精一杯だった。

暫く歩いていくと、市場と違って閑静な住宅街に出た。

周りには、何処かの古い山小屋の様な小さく汚れた木造の家もある、
綺麗な緑色の整備された芝生の周りに植物園のように多彩な花が植
えられている広大な庭のある、漫画やアニメでしか見た事のない様
な巨大な豪邸もある。

ルルは亮が眺めていた豪邸に入って行った。

『ちよつと、ルル。何勝つてに入っているんだよ！
怒られるぞ。』

亮は慌てて言ったが、
ルルは一時キョトンとした顔をしたあと笑いながら言った。

「何言っているのよ。
此処が私の家よ。」

『はい！？』

亮は驚いた。

「私の家は貴族なの。
貴族ならばこんな豪邸は当たり前よ。」

ルルは自慢気に言った。

そんなルルをよそに亮は口をぽかんと開けたまま固まっている。

「早く来ないと置いて行くわよ。」

『お、おう。』

亮は慌ててルルについて行った。

亮は門をくぐり50mくらい先にある玄関を目指した。

ルルの後に続いて玄関の扉をくぐると、

「おかえりなさいませ。」

数十名の冥土「メイド」や執事がルルの帰りを出迎えた。

すると一人の執事がルルに近付いた。

「おかえりなさいませ、ルル様。」

そちらの方はどちら様で？」

「私の命の恩人のリヨウよ。」

彼にお礼としてご馳走をしたいから連れてきたの。

だから、食事の用意お願いね。」

「かしこまりました。

それではすぐにでも用意させて頂きます。

それではリヨウ様、食事の用意が整うまで十分お寛ぎ」オクツロギ
「下さい。」

「じゃあ、食事が出来るまで部屋で寛いでいればいいわ。

ついて来て！」

それから亮は屋敷中を案内され最後に亮の部屋を案内された。

「此処がリヨウの部屋。」

『うおー。凄い。』

部屋の中はテレビで紹介されているような超高級ホテルのよう……いや、それ以上にゴージャス感があり、広さも民家一軒分以上あった。

「ごめんね。こんな粗末な部屋で……」

『どこが粗末なんだよ！』

全然良いじゃないか、俺なんかがこんな部屋を使っても構わないのかよー！』

「別に構わないわよ。」

どうせなら今日、此处に泊まっていくな？
泊まる場所決ってないんでしょ？

父様も母様も暫く戻ってこないから。」

『いいのか？』

「うん。ついでに私と同じ魔法学校に入らない？」

『え……』

「そう言えば、基本魔法は覚えたけど、属性魔法はまだだったなあ。」

時空移転魔法を知るにもちょうどいいし……」

『いいのか？』

「良いわよ。」

どうせ人間界へは戻れないんでしょ？

これからこつちの世界で生きていくのであれば魔法は必要不可欠だし……」

『学費とかはいいのか？』

俺、金持っていないんだけど……』

「学費？魔法学校は学費はタダよ。」

寮生活での生活費はいるけど、ギルドに入るまで私が負担してあげるわ。」

『ギルド？』

「ええ、ギルドはまあ、簡単に言えば何でも屋ってところね。そこですら生活費ぐらい十分賄える「マカナエル」わ。」

『そうか、ありがとう。』

それじゃ、お言葉に甘えてそうするよ。』

「分かったわ。それじゃ、編入の手続きはこっちでしておくわ。

三日後から学校だからそれまで此所に泊まっていけばいいわ。」

『分かった。ありがとう。』

「それじゃあ、またね。

食事の用意が整ったら冥土が呼びに来ると思うから、ゆっくり寛いでね。」

ルルはそう言って部屋を出ていった。

亮は呼ばれるまでベッドで一眠りしようとした。

だが、なかなか寝付けなかった。

別に眠くない訳ではなく、つい昨日までゴツゴツした石の上で寝ていたので、いきなり超ふかふかのベットでは眠れないのだ。

仕方ないので亮は床に寝る事にした。

どちらかと言うと亮にとっては床の方が寝やすく、すぐに丸くなって寝た。

〳〵一時間後〳〵

「…様、…ウ様、リヨウ様。」

「誰だ？俺の眠りを妨げる奴は？」

亮がゆっくり目を開けると心配そうな顔をして亮を揺すっている冥土がいる。

「リヨウ様、良かった。

大丈夫ですか？」

冥土は心配そうに尋ねた。

『へ？大丈夫って何が？』

亮がさりげなく言うと、冥土はほっぺたを膨らませて言った。

「何がって、床に倒れていたではありませんか。
心配したんですよ。」

この時になって亮は冥土が何を心配していたか分かった。

『あ、大丈夫だ。ただ単に寝てただけだから。』

「寝るんだったらベットで寝て下さいよ。
余計に心配するじゃないですか！」

冥土は少し怒った口調で言った。

『ああ、悪い悪い。』

「はあ、食事の用意が整いました。食堂にご案内しますのでついて

来て下さい。」

亮は冥土の後について行くと大きな部屋に辿り着いた。

室内には真ん中に金でできた大きな長机があり、その上には見た事のない様なとても美味しそうな料理が並んでいた。

亮はその料理を見た瞬間涎「ヨダレ」が垂れそうになった。

机の端っこにはルルが黒いドレスを着て座っている。

「さあ、亮。これ全部食べても良いわよ。」

ルルは冗談混じりで微笑みながら言った。

『本当に全部食べても良いのか?』

亮は真剣な顔をして言った。

「た、食べられるのであれば…」

ルルは余りに亮が真剣な顔をして言うので少し引きずって言った。

ルルがそう言った瞬間亮はパツと椅子に座り料理を貪り「ムサボリ」喰い始めた。

亮は次から次へと皿を綺麗にしてゆき、人間とは思えないような早さで食べていった。（実際、人間ではないのだが…）

ルルや亮の周りを取り囲んでいる執事や冥土はその光景を見て目を

丸くしている。

一時間と経たない内に山の様にあつた机の上の料理は今は綺麗な皿だけになっている。

「リヨウ、あなた食べ過ぎよ！」

さっきの料理は20人前くらいあつたのよ！」

『え、やっぱ全部食べるのは不味かつたのか？

それなら謝るが……』

「いや、別に良かったんだけど、あなたいつもそんな大食いなの？」

『いや、いつもはほとんど食べないのだが、今回は重度に腹が減つててなあゝ。』

なんせ35、6日間、飲ま………』

「しまった。

“35、6日間、飲まず食わずだった”
なんて言つたらまた怪しまれるなあゝ」

「35、6日間、のま？」

『この世界に来てから35、6日間の魔物に警戒しながらさまよつていたから、ろくなもの食つてなかったんだ。』

「ふゝん、そうだったんだ。大変だったわね。」

「ふう、何とか誤魔化せた。」

『ああ、大変だったぞ。』

それよりラウス魔法学校について聞かせてくれないか？』

亮は注意を逸らすために話題を変えた。

「良いわよ。」

ラウス魔法学校はミース国の三年制男女共学の魔法学校の五校の内の一校で全校生徒約一万人前後。場所は此所から歩いて15分程度の所にあるわ。」

今は夏休み中で三日後からまた学校なの。あと、全寮制だから学校がまた始まると寮生活になるわ。」

『どんな事を学ぶんだ？』

「魔法学校って言うくらいなんだから、まず魔法ね。他にも剣術、錬金術、魔法歴や調合術とかかな。」

『ふん。』

「他に何か聞きたい事とかある？」

『いや、特にない。』

「そう、じゃあ、ちょっと出かけない？」

亮の服とか買わないといけないしね。」

『え？服も買ってくれるのか？』

「仕方ないでしょ。リヨウはお金持っていないんだから。それに、この世界じゃあその服装はまずいしね。」

『悪いなあ。ありがとう。』

「良いのよ別に、こっちだって恩返しのもりでやってるんだから…

さあ、行きましょ。」

ルルと亮は屋敷を出て街に向かった。

くくラウス城下町くく

「此所はミース国の首都ラウスの城下町よ。

ここに来れば必要な物は何でも揃うわ。」

ルルは周りを歩きながら亮に説明した。

まず、亮達は衣服屋に行った。

亮の服を買ったためだ。

そこで亮は日が頭の上に登るまでルルに着せ替え人形にされていた。

結局買った物は、黒いロープに黒いマント、黒いズボンに黒い…
買った物の7、8割が黒い衣服だった。

「リヨウって黒が似合うのね、買った物ほとんど黒になっちゃった。」

『ああ、だがこれは……………』

「買い過ぎだー！」

亮は左右両方の手に大きな袋を三袋ずつ持っている。

だが、亮が竜人のせいかまたは約30日間のジョゾの特訓のせいかわは少しも両腕に重さを感じなかった。

だからといって、両腕に三袋ずつ人込みの中を歩くのは邪魔である。

「そう？でも、こんなの序の口よ。」

ルルは微笑みながら言うとして少し喫茶店で昼食を取り、今度は高級ブランド店に連れて来られ日が沈むまで買い物に付き合わされた。（午後買った物は全てルル用）

帰る頃には亮の両手には10袋ずつ吊り下げられていた。

常人ならそれを持ち上げられないだろう。

だが、亮はそれらを難なく持ち上げ歩き回っている。

しかし、

「おい、いってなー！邪魔なんだよ！」

『すみません、すみません。』

亮が動く度に荷物が通行人にぶつかり、その都度に亮に暴言が吐かれる。

そして、その都度に亮が謝る。

そんな中、ルルはスキップで次の場所へと向かう。

これが日没まで続いたので亮は身体的な疲労ではなく、精神的な疲労でボロボロだった。

しかもルルが帰り道、屋敷の門の前で亮に決定的な精神的ダメージを与える一言が吐かれた。

「物体浮游魔法を使えば良かったのに…」

それを聞いた瞬間、亮の目は点になり石の様に固まった。

ルルはそれに構わず屋敷の中へと帰って行った。

「リョウ、何してんの？早く帰るわよ。」

ルルが家に入る間際に亮にそう言った。

『お、おう。』

亮はハツとして最後まで意地で魔法を使わず、泣きそつになりながら屋敷に帰っていった。

そして亮は決意した

もう、ルルとは一緒に買い物に行かないと…

〓翌朝、亮の部屋〓

『うーん、良く寝られた〓。』

亮は床で伸びながら言った。

昨晚は昨日と同じ様に床で寝た。

やはり、亮にとってはふかふかのベットは合わないようだ。

コンコン

その時、ドアのノックの音が聞こえた。

『どうぞ。』

ガチャ、

亮の声と同時にドアが開きルルが部屋に入ってきた。

「まさか…」

亮はルルの服装を見て嫌な予感がした。

「リョーウ。お買い物に行きましょう。」

亮の嫌な予感は的中した。

だが、亮はこんな時のために今日の用事を作っておいた。

『朝っぱらから買い物かよ！』

だが、残念だな。今日は図書館に行く用事がある。』

「何で図書館なんかに行くの？」

ルルは不思議そうに聞いた。

『まだ、この世界の事が良く分からないからだ。
あと二日で学校も始まることだしな。』

「えー。しょうがないなあ。」

仕方ないからミリーと行こっか。」

ルルは残念そうに言って、亮の部屋を立ち去った。

「ミリー？まあ、誰だか分かんないけど、きっとルルの友達だろう。」

亮はそれから朝食を取り、図書館へ向かった。（図書館の場所は昨日、ルルに教えてもらった。）

〓ラウス王立図書館〓

「おゝ、やっぱり王立ってだけあってでかいなあ。」

ラウス王立図書館は外見からすると城だ。

ルルの話によると昔の古城を改装してそのまま図書館にしたらしい。

中は地下一階から地上八階のフロアまで全て本が置いてあり（しかし、地下一階は閲覧禁止図書）、蔵書数は10万冊を超えるミース国最大の図書館だ。

亮は魔界での常識を身に着けるために児童図書のフロアで本を読み耽っていた。

だが、17歳の少年が児童図書のフロアにいることはかなり恥ずかしい。

更に、亮は時々来る子どもに「お兄ちゃんこれ読んで〜」や「お兄ちゃん隠れんぼしよ〜」など子どもに遊ばれていた。

亮は日が暮れる前に何とかして児童書を何冊か読み魔界の常識を身に着ける事が出来た。

そして、図書館の閉館までまだ時間があつたので今度は時空移転魔

法について調べる事にした。

だが、専門書などで探してみたが一冊しか見つからず、その本にも時空移転魔法については、

“魔界、竜界、人間界を移動するための魔法”

としか書いていなかった。

仕方がないのでこの日はこれで帰る事にした。

遅れましたがここで亮が図書館で学んだ魔界の常識の一部を書きます。

魔界は現在、ナルニス大陸を支配するミース国、ガストロ大陸を支配するゲブクロス帝国、サード大陸を支配するアウステル共和国、キヤング大陸を支配するホルニース国の四カ国があり、その四カ国の平和条約によって世界の均衡は保たれている。

また、魔界は魔法が発達している代わりに科学が進歩しておらず電気と言うものは存在しない。

そして、各大陸ごとに“秘境”と呼ばれる場所が存在し、そこは自然が多く魔物のすみかであり人を寄せ付けない。

以上です。

～～翌日～～

今日は亮が明日、編入すると言う事もあって挨拶をするためにルルと学校へ向かった。

魔法学校は前にも述べたように屋敷から徒歩15分程の所の城下町の中にある。

魔法学校の場所はまだルルに案内されていなかったなので亮は楽しみだった。

亮はルルと喋りながら学園へ向かった。

亮は校門の前に立つと亮はその大きさに唖然した。

亮の目の前にはラウス城よりは小さいものの王立図書館よりは遥かに大きい城が建っていたのである。

『ここがラウス王立魔法学校……』

「そうよ。」

さあ、中に入りましょう。」

ルルが校門を通るのをみると亮もそれに続いて校門をくぐった。

校舎の中に入って行くと、校舎の中は大理石で出来た廊下に金箔の少し混じった石の柱。

また、所々に高価そうな絵画やオブジェが飾ってある。まるで学校と言うよりどこかの美術館か高級ホテルのようだった。だが、亮が一番気になった事は…

『何で夏休み中なのにこんなに生徒がいるんだ？』

「この前にも言ったようにここ寮があるでしょ。だから、学校から家までがあまりにも遠い人とかは夏休み中にも寮生活をしているの。と言っわけで、学校も開放しているのよ。」

『ふん。』

亮達が話しているうちに、亮達はいつの間にか学長室の前に着いていた。

「じゃあ、入るわよ。」

ルルが学長室のドアをノックしようとしたその時

『待つて!』

「何なのよ?」

『学長ってどんな感じの人?』

「何?いきなり。」

『いや、なんかいつも偉そうに威張っている爺さんみたいな学長は嫌だな。』

『つて思つて...』

「それなら大丈夫だと思うわよ。」

学長は確かにお爺さんだけど、あまり威張らず生徒に尽くしてくれるタイプよ。」

『そうか、それなら良かった。』

亮が安心してそう言うのとルルはドアをノックした。

「どうぞ」

部屋からしわがれた声が聞こえ、ルルはドアを静かに開けた。

亮達が部屋に入ると学長と思われるお爺さんが机に座り書類らしきものを片付けている。

亮がドアを閉めると、お爺さんは手を止め前を向いた。そして亮達を確認すると、しわしわの顔に更にしわをよせながら微笑んだ。

「良く来たね。君がリヨウ君だね。」

そのお爺さんはしわがれた優しい声で言った。

『はい、あなたがここの学長ですね。』

「さよう、儂がここ、ラウス魔法学校の学長じゃ。

ルルから話を聞いておる。確か竜界から来たんじゃないな。」

「！！」

「学長、違います。

彼は人間界からです。」

「お、そうじゃった、そうじゃった。

すまんのう。最近、歳のせいか物忘れが酷くてのう。」

「いや、物忘れも何もどう見ても今の俺って竜には見えないだろう。それにしてもビビった」

『い、いえ。』

「まあ、気を取り直して、我がラウス魔法学校へようこそ。儂らは主を歓迎するぞ。」

『ありがとうございます。』

「では、早速じゃがまず身体能力検査をするぞ。」

『身体能力検査？』

「魔量、属性、筋力、持久力、それに身長、体重、視力、聴力などを測るってことよ。」

ルルが亮に耳打ちした。

『おい、そんなこと聞いてないぞ。』

「あ、そういえば言い忘れてた。」

『はあ。』

亮は溜め息を吐いた。

「おい、そんな所でコソコソしないで早く来るんじゃ。」

学長はいつの間にか席を離れ、ドアを開けて廊下で待っていた。亮達は慌てて学長の後について行った。

亮達は暫く歩いた。

『なあ、何で空間移転魔法を使わないんだ？』

亮は不思議に思いつつ聞いてみた。

「え…」

リヨウって空間移転も使えるの？
凄いわね。

でも、学園内は空間移転魔法は禁止なの。
それに検査する場所リヨウは知らないでしょ？」

『あ、そっか。』

亮は納得したように言った。

空間移転魔法は目的地のイメージをしながら使わないといけないので、目的地を知らない場所には行けない。

それから暫く沈黙が訪れ、出発してから20分くらいしてやっと目的地に着いた。

「着いたぞ。」

ここは新入生や編入生の身体能力を検査するためにだけに造られた棟じゃ。」

学長が自慢気に言った。

その棟はまだ完成してあまり経っていないのか、まだ綺麗だった。

まず、その棟の一階のある部屋に入った。その部屋の真ん中には亮が見た事のある赤い水晶が置いてあった。

「まず、その“力の水晶”に全力で魔力を送るのじゃ。」

「俺が思いつきり魔力を送ったら割れちゃうんだよね。」

亮は竜界での事を思い出し、水晶が割れないように少し魔力を抑えて送った。

『ハアアアアッ』

すると、赤い“力の水晶”は青くなった。

亮の魔力はルル達の所に漏れていた。

「す、凄い魔力じゃ。こんな奴に会ったのは何年ぶりじゃろう？」

魔力の質も何だか人間のものではないようじゃ。」

「何？この魔力…何だか押し倒されそう…」

ルル達は亮の威圧的な魔力に耐えていた。

その時、

ピシッ

水晶に罅「ヒビ」が入った。

「今すぐ魔力を送るのを止めるんじゃ！」

咄嗟に学長が叫んだ。

だが、学長の声より亮の反応の方が早かった。

この事を予期していた亮は、水晶に罅が入るのと同時に魔力を送るのを止めた。

亮は竜人とは言えど今は竜程の堅牢な鱗を持たないので、今水晶が爆発しては負傷は免れない。それよりか、生身の人間であるルルや学長では死に至る可能性だってある。

何とか亮の反応が早かったお陰で水晶は罅が入る程度で収まった。

「『ふ〜っ』」

学長と亮は安心し一息吐いた。ルルは水晶が爆発したらどうなるのか分からないのか、水晶に罅が入ったことに驚いている。

「リヨウ、凄い魔力じゃない。」

ルルは興奮のせいか声を裏返っていた。

「うむ。確かに凄い魔力じゃった。」「危うく死ぬところじゃったわい。」「」

『そうか？「いやゝ、危なかった、危なかった。」』

「さあ、次の部屋に行くかのお。」

『おう。』

亮達は次の部屋へと向かった。

「“力の水晶”と来たら次は…」

亮は次の部屋が何なのが何となく推測できた。

“力の水晶”の部屋から次の部屋に移った。

その部屋は先程の部屋に似ており、違う所は真ん中の台に置いてある水晶の色が違っただけだ。

「あれは“種の水晶”と言うものじゃ。」

その水晶は竜界で見た赤い“種の水晶”とは違い、透明な水晶だった。

「今度はその水晶に魔力を送るのじゃ。」

さすれば、主の属性が分かる。

今度はほんの少しの魔力でいいんじゃないぞ。」

学長は念を押すように言った。

亮は“種の水晶”に微量の魔力を流し始めた。

だが、

「色、変わりませんね。」

ルルが無表情でボソツと言った。

「こ、これは驚いた。」

こやつ、無属性なのか。

この学校で無属性の魔導師とは何年ぶりかのおゝ。

確か40年くらい前かな。

あの少女の名は……

マリア…

ん？そういえば最近、無属性の生徒が入学したって聞いたような。名はス…

何じゃったかのぉ？」

『学長、これどうするんですか？』

亮は独りで思い耽っている学長に聞いた。

「こんな展開前にもあったなあ」

学長「お、おお。
すまん、すまん。
もう離しても良いぞ。」

「学長、リヨウは何属性なんでしょう？」

普通なら水晶の色が変わるはずですが…」

ルルが学長に聞いた。

学長「うむ。

リヨウは無属性じゃな。」

学長があつさと答えた。

ルルはそれを聞いて固まった。

「やっぱり」

「す、凄いじゃないリヨウ。

あなたには驚かされるわ。」

無属性の魔導師なんて今、この世界にリヨウを除いて7人しかいないのよ。」

『え？そんなに珍しいのか？』

「うん。」

この学校にはスヒルとリヨウだけよ。」

「お、そうじゃった、そうじゃった。
名はスヒルか…」

『スヒル？』

「そう、私と同じ一年S組よ。」

一年とは言えど実力はギルドSSS（ギルドでの最高クラス）よ。

この前なんか喧嘩を売って来た三人組の三年生を一人で、しかも無傷で相手をボコボコにしちゃったんだから…

多分、学園の生徒の中で一番強いわ。」

『ふん。一度闘ってみたいな』

「さあ、次の部屋に行くぞ。」

それから三時間、亮は学校でやるような健康診断や体力テストでやるようなことをやらされた。

健康診断の結果は全く問題なく、むしろ視力検査や聴力検査では人間外れの結果で、体力テストではスヒルと同等か、またはそれ以上だった。

結果が出る度にルルと学長は目を丸くして驚くばかりであった。

学長「身体能力検査はこれで終わりじゃ。」

明日は八時半に一年職員室に来なさい。場所はルルに案内してもらいなさい。くれぐれも初日から遅刻しないように。」

身体能力検査が終わり学長が言った。

「あのく、リヨウのクラスはどうするのですか？？」

ルルが学長に聞いた。

「うむ、ルルと同じS組でいいじゃろう。」

能力的に申し分ないし、ルルが近くにいた方がリヨウも安心するじやろうからな。」

「そうですか、分かりました。」

ルルは嬉しそうに言った。

「じああ、帰ろつか？」

『ああ、そうだな。』

亮達はその後学長に挨拶をして学長室を後にした。
くく帰ridoくく

亮とルルは歩きながら話していた。

「それにしてもリヨウは凄いな。」

基本魔法は完璧だし、魔力も凄いな、それに加えて無属性なんて羨ましいなあ。」

『いやいや、そんなことないよ。』

俺はまだこの世界に来てまだ間もないし、それに剣術とか錬金術は全く分らないしな。』

亮は照れながら言った。

「いや、リヨウは剣術も錬金術も魔術と同じ様に才能があると思うなあ。」

そう言えば学長はリヨウはSクラスって言ってたよね。良かったね一緒にクラスで。」

ルルが話を変えて言ってきた。

『ああ、分からないところは教えてくれよ。』

「うん。」

ルルが大きく頷いた。

『ところでSクラスって言うけどどんなクラスなんだ?』

「そう言えばリヨウにクラスの事を言っていなかったわね。」

ラウス魔法学校は一学年S、A、B、C、D、E、Fの6クラスに別れているのそれで才能、実力がある人がSやAクラスというふうに才能と実力でクラス分けしているの、リヨウと私はSクラスだから一番上ってことね。」

『俺みたいのがSクラスなんかについていいのか?』

亮が不安気味に言った。

「大丈夫よ。」

リヨウならついていくどころか上位に入るんじゃないかしら。」

「そうか、それは楽しみだな。」

亮の口調に似た声が後ろから聞こえた。だが、声の主は亮ではない。

『「え…？」』

亮とルルは驚いてバツと同時に後ろを振り向いた。

亮達が振り向くと亮と同じ年くらいの少年が微笑みながら立っていた。

「あら…スヒルじゃない。」

いつからいたの？」

「こいつがスヒルか…」

「ついさっきお前たちが歩いているのを見かけてなあ」

それはそうとしてそっちの人は話からして編入生？」

「そうよ。名前はリヨウ。明日から私たちと同じ一年Sクラスよ。本人曰わく、人間界から来たらしいわ。」

リヨウったら凄いのよ。基本魔法は完璧だし、運動能力も魔量も凄いわよ。」

ルルは胸を張って言う一方、亮は照れている。

「ふん。属性は？」

「属性もあなたと同じ無属性よ。」

「！！！」

ここでスヒルが亮の前で初めて驚きを顔に表した。

「お、凄いじゃないか。」

これからよろしくな。期待してるぞ。」

スヒルはそう言って、亮に握手の手を差し伸べた。

『ああ、よろしく。』

そう言っただけで亮はスヒルの手を握り握手をした。

「！！！」

スヒルが亮と握手をするとスヒルは亮から何かを感じ取った。

「じゃあ、私たちは帰るからまた明日ね。」

ルルがスヒルに言った。

「お、おう。また明日な。」

『じゃあ。』

亮も右手を挙げて挨拶をした。

そして、亮とルルはその場を立ち去った。

「あの感じ…」

何だろう、あの異質的な感じは。

リヨウか…楽しみだな。」

スヒルは一瞬微笑み自分の家へと帰っていった。

第六章 入学

くく翌朝くく

『うん、六時か』

亮が床で伸びながら言った。

それから、亮はクローゼットに向かい、黒いローブに着替え始めた。

「今日から学校だな。」

魔法学校には制服はないのだが、ルルの話によると基本的に皆ローブを着ているらしい。

亮はそれからクローゼットの中の衣服や必要な物をトランクに詰めていった。と、言っても必要なものはほとんどないのだが：

荷物の詰め込みが終わった頃にはちょうど、七時になっていた。

亮が食堂に朝食を取りに向かっていると、ルルが浴場から出てきた。朝の散歩から帰ってシャワーを浴びていたらしい。

「あら、リヨウ。今から朝食？」

『ああ。』

亮は頷きながら言った。

「じゃあ、一緒に行きましょう。学校生活について色々言わないといけないことがあるから…」

それから、校則やクラスの雰囲気などをルルに教えてもらいながら食堂へと向かった。

それから朝食を食べ、たくさんの冥土や執事に見送られて学園へと向かった。

登校時間中二人は無言のまま学園へと向かった。

学園に着くとルルが口を開いた。

「職員室まで案内するわ。
ついて来て。」

校舎内に入ると既に多くの生徒が行き交っていた。

亮は五分程歩いた。

「あそこが一年の職員室よ。」

あつ、今職員室の前に立っている先生が私たちの担任の先生よ。
あの先生に話し掛ければいいと思うわ。」

ルルは職員室の前に立っている30歳前後の男を指差しながら言った。

『あの先生か、一見どこにでもいそうな先生だな。』

「まあね。」

「じゃあ、私は先に教室に行っているから。」

ルルはそう言っただけで近くの階段を登って行ってしまった。ルルが行ってしまったのを見ると、亮は職員室の前に立っている担任に少しずつ歩み寄っていった。

『あ、あの、
今日編入する亮ですが…』

亮は近くまで寄り、少し小聲で先生に言った。

「おつ、君がリョウか…
話は学長から聞いている。人間界から来たんだってなあ。」

『はい、今後宜しくお願いします。』

亮は先程よりも大きな声で言った。

「ああ、宜しく。」

さあ、ついて来なさい。教室まで案内するから。」

そう言っただけで、担任はルルが登っていった階段を上がって行った。

亮はその担任について行った。周りはもう着席の時間に近いからかほとんど人がいない。

暫く歩いて行くと、一年S組と書かれた教室に着いた。

ゴーン、ゴーン、ゴーン

教室にたどり着くと同時に学校の予鈴が鳴った。この学校の予鈴は実際に鐘を鳴らしているようだ。

「では、私が合図したら教室に入って自己紹介をしなさい。」

鐘が鳴り終わると担任は言った。

『はい』

亮は素直に返事をし、担任は教室へと入っていった。
～～～教室～～～

「おはよう、ルル」

ルルが教室に入ると挨拶をかけられた。

ルルが声の主の方へ振り向くとルルの親友ミリーがいた。

「おはよう。」

ルルは挨拶を返した。ミリーの側にはスヒルがいる。先程までミリーはスヒルと話していたようだ。

ルルは大きなバッグを机に置きミリーの側に歩み寄った。

「リヨウも今日から学校だろ？」

ルルが近づくとスヒルが聞いた。

「ええ、先生と一緒に来ると思うわ。」

ルルはスヒルの質問に答えた。

「リヨウ？誰それ？」

そう言えば、ミリーはまだリヨウのことを知らない。

「今日、編入する子よ。」

「ウソー。どんな子？」

ミリーは、はしゃいでいる。

「それは来てからのお楽しみ。」

「もったいぶらないで教えてよ。」

「じゃあ、これだけは言っておくわ。
リヨウは強いよ。」

「えっ？ルル、その子と闘ったことあるの？」

ミリーは驚きながら言った。

「ううん、でも身体能力抜群だし、魔力も凄い。なんだか、彼には潜在的な力を感じるわ。」

「ああ、ルルの言う通りだ。あいつはただ者ではない。俺も手を握った時、あいつの中にある異質的な力を感じた。」

ルルが言つとスヒルもそれに賛同するように言った。

「そう…」

ミリーは落ち着いて言った。

「あつ、そろそろ鳴るわよ。」

ルルは時計を見て言った。

時計の針は八時三十分前を指していた。

三人は時計の針を見て自らの席に着いた。
周りで話している生徒も着席した。

ゴーン、ゴーン、ゴーン

最後の一人が着席すると同時に予鈴が鳴り、少し間をおいて担任が入ってきた。

「みんな、おはよう。早速、今日の連絡事項を伝えたいところだが、今日からこのクラスに入る編入生を紹介しようと思う。」

担任が愛想なく言うとか教室内がざわめき始めた。

「入って来なさい。」

担任が廊下に向かって言った。

〓 廊下 〓

担任が教室に入った後、亮はどんな自己紹介をするか考えていた。

「入って来なさい。」

ある程度構想をたてたところで担任の合図があった。亮がドキドキしながら教室に入ろうとすると…

「遅刻だーーーーー!!」

亮は不意に後ろから叫び声が聞こえ、足が止まり後ろを振り向いた。

すると、髪を金髪に染めたオールバックで長身の少年が走って来た。その少年は固まっている亮には目もくれずに教室に飛び込んだ。

その直後、亮はハツとして教室に首だけ出して中の様子を伺った。

「再び教室」

先生の声の後に入ってきたのはノベスだった。

先生や編入生を期待していた生徒は目を点にさせ時間が止まったかのように見えた。

止まった時間を動かしたのはある一人の生徒だった。

「センサー、編入生とはノベスのことですか？」

「ん？俺が編入生？それじゃあ、まずは自己紹介か」

ノベスは調子に乗って勝つてに自己紹介を始めた。

「えー、今日編入してきたノベスです。属性は火。趣味は遅刻と授業中の昼寝。長身で学園一カッコいい俺ですが、どうぞよろしブー！？」

自己紹介があと少しと言うところで我に返った担任がノベスの顔に右ストレートパンチを喰らわしノベスを吹っ飛ばした。

「お前、何回遅刻したら気が済むんだ！？」

しかも、学園一カッコいいだど？

学園一カッコいいのは俺に決まっているだろうがぁー！」

「わー、担任が初日早々キレたー。それに怒るところなんか間違ってるー。」

亮が扉の端で顔だけ出しながら思った。

「センサー、早く編入生を紹介して下さーい。」

いつものパターンっていう風に、ある女子生徒が呆れながら言った。

「おっ。そうだった、そうだった。」

ここで担任がくだらない口論を切り止めて言った。

「リョウ、入って来い。」

そう言われて、顔だけ出していた亮は慌てて教室内に入った。

亮が教室内に入った瞬間、教室は一気にうるさくなった。ルルを除く女子は「キヤーキヤー」叫びまくり、男子は羨ましい目で（特にノベス&担任）騒ぎ始めるのだった。

亮は正直驚いた。亮は人間界で昔からカッコいいと言われたことがあったが、ここまで言われるのは初めてだった。

魔界は人間界とかつこよさの基準が違うらしい。

騒ぎの途中で担任は止めに入り、クラス内を静めた。

「これから彼に自己紹介をしてもらう。」

担任はそういい、亮に目で合図をした。亮はそれに合わせて自己紹介を始めた。

「ええっと…」

今日からこのクラスにお世話になるリヨウです。属性は無。以後よろしく。」

短い自己紹介だったが教室を盛り上げるには十分だった。

属性が無だと言うことが皆を盛り上げたのだ。

とても稀少な魔界での八人目の無属性を操る者が自分たちのクラスに入ったという興奮が教室内に満たしたのだった。

「リヨウ、一番後ろの席が空いてるからそこに座りなさい。」

ある程度騒いだところで担任が興奮を静め、亮に指示した。

「あ！そこ俺の席」

亮はそれを聞いて足を止めたが、

「俺の席だあゝ？遅刻&授業居眠りするような奴にはその席でいいだろう。」

担任は指を指しながら言った。その指の先には一番前の席に置いてある、足が一本足りないボロボロの机に背もたれがなく、座ったら板が割れそうな椅子があった。

「マジっすか？」

「ああ、残念ながらマジだ。これから遅刻、授業居眠りを一切しないと誓うなら元の席にしてやろう。」

「……これからは遅刻、授業居眠りは一切しないことを誓います……」
担任が偉そうに言うとノベスは泣きそうになりながら低い声で言った。

「今後からその誓いを破るなよ。」

「……はい」

ノベスが低い声で返事をした。

「よし、元の席に戻って良いぞ。
さあ、今日の連絡事項は……」

『先生、俺はどこに座れば…「忘れられた…」』

「お、そうだった、そうだった。リヨウはルルの隣に座れ。」

亮は俯き「ウツムキ」溜め息を吐きながら自分の席に向かった。

それから連絡事項を聞き、その後の長い始業式を何とかやり過ごし、1日の学校生活を終わらせた。
帰りのHRが終わるとみんな一斉に荷物を持って教室を出て行った。

ルル「さあ、リヨウも行くわよ。」

『行くってどこに?』

ミリー「寮に決まっているじゃない。荷物を置かないといけないでしょ。」

ルルの側にいたミリーが答えた。

『…誰?』

亮はクラスメートの名前はルルとスヒルとノベスくらいしか知らない。

ミリー「あつ、そう言えば自己紹介まだだったわね。

私の名前はミリー。属性は水よ。よろしくね」

ミリーは最後にウィンクをして言った。

『よろしく。』

そう言えばルルの属性まだ聞いてなかったな」

ルル「そういえばそうね。
私は風よ。」

『風かゝ、』

スヒル「おい、行くぞ。」

スヒルは待ちくたびれたような感じで言った。どうやら四人で行くつもりらしい。

亮達は荷物を持って教室を出ようとした。

「待って」

教室を出ようとするとなんとなく耳障りな声がした。

亮達が振り向くとそこにはノベスがいた。

亮達は無視して行こうとしたら、ノベスが走って来たので一緒に行くことになった。

「俺様を置いていくなよ」

ノベスがグチグチ言っていたがみんなそれを無視し、ミリーが口を開いた。

「リヨウはどこから来たの？ラウスから？それとも他の所から？」

「いや、なんて言うか俺、実を言うとこの世界の人間じゃないんだ。」

「「「え！？」」」

ルル以外の三人が驚いた。

「それって、どういうこと？」

ミリーが不思議そうに尋ねた。

「俺は人間界の人間なんだ。」

それから亮はラウス郊外で話したことを五人にもう一度聞かせ、これまでの経緯も話した。勿論自分が竜人だと言うことは言っていない。

話の途中でミリーとノベスが「アリステル現象って何？」とうるさかったので、ルルが説明した。アリステル現象という言葉は専門的用語らしく知っている人はそういないらしい。

そう言うことからすると、それを理解していたルルやスヒルはそれなりに物知りだと言うことが分かる。

亮の話が終わる頃にちょうど学生寮に着いた。
学生寮も最近建て替えたらしくきれいで外見は高級ホテルを思わせる建物だった。

その様な建物が亮の周りに5棟建っている。

中に入るとロビーがあり高級感を沸かせるシャンデリアや絵画やオブジェなどもあった。

何人が生徒はロビーで鍵の受け渡しをしている。

そこでノベス、ミリー、スヒルは亮、ルルに別れを告げ自分の部屋の鍵を貰いにロビーに行き鍵を貰って各々の部屋へと帰って行った。

『で、俺の部屋は？』

亮はルルに聞いた。

「ええ、これから部屋の手続きをするわよ。
ついてきて。」

亮はルルに言われるままルルのあとについていきロビーに向かった。
「あのー、今日から学園に編入したりヨウですけど寮の手続きをお願いします。」

ルルがカウンターの受付の人に言った。

「かしこまりました。それではこの必要書類に書き込みをお願いします。」

「はい。じゃあ、亮。これ書いて。」

ルルは書類を受け取りそれを亮に渡した。

亮はその書類を受け取り、添えつけられた羽ペンで魔界の字で記入欄に必要な事項を記入した。

書類には名前、性別、クラスなど基本情報を書き、後の方には部屋はどのくらいの広さがいいかとか、何色が好きか、家具についてなど部屋の事についていろいろ問われていた。

亮が魔界の字が分かるのは亮自身も分からない。

『お願いします。』

亮は書類を受付に渡した。

「かしこまりました。では、準備が整うまで暫くお待ち下さい。」

亮とルルはその後ロビーで話しながら呼ばれるのを待っていた。

「リヨウ様、お部屋の準備が整いました。お部屋は1229号室になります。」

『どうも。』

亮はお礼を言って、ルルの元に向かった。

「何号室だった？」

『1229号室かな。』

「え？奇遇ね私は1228号室よ。亮の向かいの部屋。多分、学長の配慮だと思うけど。
じゃあ行きましょ。」

ルルが座っていたソファから腰を上げて言った。

『どこから上の階に行くんだ？』

亮が辺りを見渡しながら言った。どこにも階段やエレベーターは見当たらない。

「あれよ。」

ルルは指差しながら言った。その先には四つの空間移転魔法の魔法陣があった。

「あの魔法陣に乗って行くの右から二階、三階、四階、五階に通じているのよ。」

1001号室から1500号室までは三階にあるわ。

さっ、行きましょ。」

亮はルルに手を引かれて右から三つ目の魔法陣に乗った。

魔法陣に乗ると目の前が写真を撮られた時のように、一瞬光り光が消えると亮達は長いレッドカーペットの敷いてある廊下に立っていた。廊下には左右対照にノブのないドアが三メートルおきに並んでいた。ノブのないドアの事を除けばまるでホテルの廊下だ。

「ここが三階。右側が2001号室からの奇数番号の部屋、左側が

2002号室からの偶数番号の部屋。だから亮の部屋は右側のドアから114番目のドアね。」

『114番目ってなが！』

ドアの間隔的に考えて計算したらここから350メートルくらいあるじゃん。

この寮って外見こんなに大きかったっけ？』

確かに外で寮を見たとき寮の長さは100メートル前後だった。

「多分魔法で内部を大きくしているんだと思うわ。確かに長いけど寮の中は部屋を除いて空間移転使えるから空間移転魔法を習ったら、一瞬で行けるわよ。」

『もう習ったのか？』

「ううん。でも、空間移転魔法は日常生活でよく使う魔法だから既に知っている人は多いわ。」

歩くの面倒くさいなら空間移転で連れて行ってあげよっか？部屋は向かいなんだから大丈夫だよ。」

『ああ、頼むよ。』

亮がそう言うのとルルが手を繋いで空間移転を使った。

再び一瞬明るくなり視界が戻ると目の前に先ほどと同じようにノブのないドアがあった。

「ここが私の部屋。でその向かいの部屋がリョウの部屋。」

『このドアどうやって開けるんだ？』

それは亮にとってこの寮に来た時からの疑問だった。

「ドアに魔力を流すのよ。魔力が鍵の代わりになっているの。魔力を流すって言ってもほんの少しでいいからドアを触る程度でいいのよ。」

ルルはそう言っただけで自分の部屋のドアに触れた。すると、ドアは勝手に開いた。

「ね？閉めるときは勝手に閉まるから。」

亮はルルがやったように自分のドアを触ってみた。するとドアは、ルルの時のように開いた。

「じゃあ、またね。」

『おう、また明日な。』

そう言っただけで、二人は各々の部屋へと入っていった。

『ここが俺の部屋か…』

部屋は亮が書類で書いた通り、明るい色で統一されており、部屋は1LDKだが面積は思った以上に広く一人暮らしにしては少し広すぎる位だ。しかも、人間界のようにテレビやAV機器はなくさっぱりとしていた。リビングにはと本の入った本棚、リビングテーブルと椅子、それとソファがあるくらいだ。

キッチンを見ていると食器棚、水道の他、コンロと冷蔵庫しかない

かった。コンロや冷蔵庫には電気は使われておらず魔法の力で動いているようだ。

亮が冷蔵庫の中を見てみると中には見たことのない食材が沢山詰まっております、腐敗のことを考えなければ1ヶ月分はありそうである。

亮は早速冷蔵庫の中からいくつか食材を取り出し調理を始めた。

一時間後

亮は親子丼らしきものとコンソメスープらしきものを作った。親子丼なので亮は本当は味噌汁がよかったのだが、この世界にはあいく味噌やそれに代わる食材がなく、このようなコンソメスープらしきものになったのである。

コンコン

亮がいざ食べようとするとドアがノックされた。

「私、ルルよ。」

亮がドアを開けるとルルが立っていた。

『なに?』

「すっかりご飯のことを忘れてたわ。学食に行きましょう。」

ルルが微笑みながら言った。

『え！？夕ご飯ならもう作っちゃったけど』

「うそ、リヨウって料理できるの？」

ルルは驚きながら言った。

『まあ、向こうでは誰もいなかったから、よく自炊してたし』

「そうなんだ。ん、確かにいい匂いがするわね。」

ルルは匂いの元を辿るようにして亮の部屋に入って行き親子丼とコンソメスープの所へ辿り着いた。

「ちょっと味見。」

そこでルルは親子丼を一口、また一口、遂にはコンソメスープにも手を出し始めた。

『あつ、俺の晩飯！』

ルルは味見と言いながら亮の言葉には耳にもせず

「ごちそうさまでした。」

『おそまつ…さまでした。』

最終的には全部食べられてしまった。

「リヨウの料理美味しかったわよ。じゃあ、また明日ね。」

ルルは手を振りながら何も悪気のなさそうに部屋を出て行った。恐

らく亮の晩飯だったことをすっかり忘れているのだろう。

『じゃあ』

亮は無理やり笑顔を作り手を振った。

ルルが部屋を出ていくと亮は溜め息を吐いて晩飯を諦め、寝ることにした。

「明日は魔器生成と召還術があるのか」

勿論そのあと、錬金術と魔法歴、基本魔術の授業が入っている。ルルの話によると授業は一日90分×5時間あり、大学の授業のやり方である

第七章 魔界の空にて

亮が寝ようと目を閉じる寸前に小窓から広がる魔界の満天の星空を見た。亮は寝るのを忘れてその眺めをじっと見つめていた。見ると見るほど亮の中にある一つの欲望が大きくなっていった。

「この空を自由に飛び回ってみたい。」

という欲望が…

だが、この魔界ではドラゴンはただの魔物。竜界のようにむやみにドラゴンでいると人間に狩られてしまう。

そのくらいは、亮にも常識として身に付いていた。

だが、亮は自分の欲望を抑えることが出来ず決心をし空間移転で寮のロビーに移転し、寮を飛び出した。外は夜中と言うこともあつて人氣が少ない。

亮は走って学校敷地内の森に入った。この森は剣術の訓練やサバイバルなどに使われているらしいが、暗い森には人の臭いがしない。亮は人の有無を確かめると、夜空を見上げながら竜化した。

亮は人目に付かないよう一気に急上昇をしてある程度の高度に行き着くと魔界の満天の夜空を自由に飛び回った。

「これが魔界の空か。なんて気持ちいいのだろう！」

初めは辺りに雲が見当たらなかったので人に見つかるのを恐れたがよく考えてみると、もし見つかったとしても自分以外にこんな高空を飛べる人間なんていないだろうと高を括っていた。

亮は喜びながら満天の夜空の丸い月に対して体に溜まった竜の力をプレスとして思いっきり吐き出した。それは亮が吐いたプレスの中で今までにないほど大きく、また美しい紅蓮「グレン」の炎だった。

だが、このプレスが亮に災厄を招くのであった。

「――寮、スヒルの部屋――」

スヒルは部屋に入ると荷物を片付け、それから学食で晩ご飯を済ましバルコニーで夜空を眺めながらギルドの任務依頼書を片付けていた。

「ドラゴン退治か――」

スヒルが声に出したものは依頼書のことだ。

最近ラウス近郊でドラゴンが暴れるので退治して欲しいというものである。

これはSランク級の依頼なのだがどういう訳かSSSランクのスヒルに回ってきた。

スヒルは自分が低く見られていると思い、俯いて溜め息を吐いた。そして月を見上げたその刹那、月を紅蓮の巨大な炎が覆ったのである。

「！！！！」

その時スヒルはハッとして目を魔力で強化しその炎の元を見た。

亮が目を凝らすと月光の影に竜のシルエットが浮かんだ。

「なっ！？」

「何でこんなところにドラゴンがいるんだ！？」

ここは首都ラウスの真上だぞ！

さては見張りの奴らサボってたな！」

スヒルはそう思ったが実際は違った。ちゃんと城の外壁に配備された見張りはいっかりと空を睨んでいた。

だが、見張りが見ていたのは城の外。城の内側を見ようとした兵は誰ひとりしていなかったのである。

つまり、元々城の内側にいた魔物なんて察知できなかったのだ。

スヒルはただ呆然と立っていたが、スヒルはこの竜の発見が自分にとって幸運だと思った。なぜなら、自分が今みている竜がラウス近郊で荒らす竜だと判断したからだ。

「よし、探す手間が省けたな。

それじゃあ、殺「ヤ」るか。」

スヒルは素早く戦闘用の服装に着替え、風魔法で背中に紺色の翼を生やしバルコニーから外に飛び出した。

この時、スヒルはこの任務がすぐに終わると確信していた。

スヒルにとって一頭の竜など敵ではないのだから…

亮は思いっきりブレスを吐いた後も空中浮遊を楽しんでいた。

だが、

シュン

「おっと！」

突如、亮の下方から雷が飛んできた。

亮はそれをギリギリのところであわし、雷が飛んできた方向を睨みつけた。すると亮の50m程下方に紺色の翼を纏った人間…いや、よく見るとスヒルがいた。

「何でこんな所に…。さっきのブレスはまずかったか。」

亮がそんなこと思っているうちにスヒルは近づきながら次々と雷を放ってくる。だが、亮はジョゾから教わった回避術で最小限の動きでそれらを回避していった。

スヒルとの距離が縮まるとスヒルは、腰に据え付けていた二本の双剣を左右の手に持ち、亮に切りかかってきた。

「フン」

「グルアアアアア」

ガキン！

亮はとっさに自分の爪でスヒルの攻撃を防御した。

それからスヒルは双剣で何度も切りかかってくるが亮はそれをすべ
て爪で防御するだけだった。

「こいつ…、強い。少なくとも俺が今まで闘った何よりも強い。

しかし、妙だ。

ドラゴンは好戦的な魔物のはず。それなのにこいつ、守るだけだ。

しかもこの感じ…、似ている。」

スヒルはドラゴンとやり合っているうちに敵に違和感を感じ始めて
いた。

「カマイタチ！」

スヒルは素早く剣を振ると風音が聞こえ、それが亮に迫っていた。

亮は身の危険を感じ爪を構えたが数秒後、亮は爪に何かが当たるの
を感じると同時に体中に痛みが走った。見ると身体の至る所から、
青い血が流れ出ている。

幸い急所は外れたようだ。

だが、

「止めた。フリザード！」

スヒルはそう唱えると辺りに雪あらしが発生し、それが竜巻となって亮に襲い掛かって来た。

「まずい。炎壁！」

亮は口から炎を吹き、その炎は亮の身体を包み込み雪あらしから亮の身を守った。

雪あらしが収まり、亮が炎壁を解き前を見ると、さっきまでいた場所にスヒルがいない。

その時、

「はあっ！」

スヒルが声をあげながら、亮の直上から二本の双剣を亮の首もとに突き刺そうとしていた。

スヒルは亮が炎壁を使っている間、視界が塞がれるのを利用し奇襲をするのにちょうど良い亮の後方直上に移動していたのである。

しかし、スヒルは完璧な不意打ちになると思っていたのだが実際は違った。亮は最初からスヒルを見失っていなかったのだ。亮が炎壁を使ってから、鋭い嗅覚と聴覚を駆使してスヒルの動きを読んでいた。

亮はスヒルが双剣を振りかざそうとしていた時、亮は後ろを見ずにそれをかわした。

それがスヒルが亮に背を向けるという結果になった。相手に背を向

けるということは敗北を意味する。

亮はあらかじめ準備していたファイアボールをスヒルに向け放った。

「う……」

スヒルが体勢を整えた時には亮のファイアボールは目の前にあった。スヒルは自らの死を覚悟し、目を瞑った。

その時スヒルの頭の中で低い声がした。

「許せ」

と……。

スヒルはその言葉を聞くと意識を手放した。

「ここは……」

スヒルが目を覚ますと自分はベッドに寝かされていた。始めは視野がぼんやりしていたが時間が経つにつれはつきりしてきた。周りを見渡すと、ベッドの脇にある小机、白いカーテンそして、消毒液の臭い、そこここは学校の医務室だ。

「そういえば、あの時ドラゴンの攻撃を受けて……、何で生きているんだ？確かにあれは直撃したはず。当たっていなくてもあの高さから落ちたら普通は死ぬはずだが……。」

スヒルは自分が生きていることに混乱した。

コンコン

その時、医務室の扉が開いてミリー、ノベス、ルルそして亮が入ってきた。

「あつ、スヒル起きてた。」

ミリーが満面の笑みを浮かべて言った。

「昨日はどうしてあんなところで寝ていたんだよ。意外にお前も俺より馬鹿なことするんだな。」

ノベスが笑いながら言った。

「あんなところ？寝ていた？」

スヒルはますます混乱した。

「どうしたの？もしかして覚えてないの？」

いつもは冷静沈着なスヒルが混乱しているのを見てルルは尋ねた。

「ああ、覚えていない。」

覚えている事と言ったら昨夜、ドラゴンと闘って負けたくらいだ。それが本当なら俺は今ここにはいないはずなんだが……」

スヒルが言うと、それまで俯いていた亮が僅かに反応した。スヒルはその反応を見逃さなかった。

「スヒルがドラゴンなんかに負ける訳ないじゃん。悪い夢でも見てたんじゃないの？」

ミリーが笑いながら言った。

「そうかもな」

スヒルは微笑し答えた。

「さあ、授業もあるし行きましょ。」

スヒル、授業出れる？大丈夫なら授業に出てもいいって医務の先生が言ってたんだけど。」

ルルが心配して言った。

「ああ、大丈夫だ。授業にも出よう。」

スヒルはそう言って、ベッドから抜け出し自分の持ち物を確認して、5人一緒に医務室を出た。

第八章 召還と生成

〃〃教室〃〃

亮達5人が教室に入ると中はうるさかった。今日は授業で使い魔の召喚や魔器の生成を行うからであろう。

亮はもう鐘の鳴る時間と言うこともあって着席した。するとスヒルが近づいて来て亮に耳打ちをした。

「今夜、俺の部屋で」

亮は静かに頷いた。スヒルはそれだけを伝えると自分の席についた。

「やはり、もう分かってしまったか。」

亮は小さいため息をついた。

ちょうどその時に鐘がなり担任が入ってきた。

「おつ、ノベス。ちゃんと来ているじゃないか、これで連続遅刻記録も破れたな。」

担任が嫌みたっぷりにやつきながらに言うとノベスは暗い顔をし俯いた。

「さて、今日はお前たちが楽しみにしていた儀式、使い魔召喚と魔

器生成を行う。

持ち物はいらぬ。闘技場に集合だ。」

担任はそれだけを言つて教室を出ていった。担任が出ていくと教室にいる生徒もぞろぞろと廊下に出て移動を始めている。

亮達もあとに続いて廊下に出た。みんな自分が何を召喚するのだろ
うと話している。

「やっぱ、俺はドラゴンだろうな。」

調子に乗っているノベスが言う。

「何言つてんの？それはあんたの叶わない夢でしょ？ノベスは良く
てラットじゃない？」

ミリーが笑いながら言った。

「ラットって…おい一番弱いやつじゃねーか。」

「ノベス自体弱いのに強い使い魔が出ちゃったら使い魔にも馬鹿に
されちゃうよ。今でさえみんなに馬鹿にされてるのに」

ルルがいうと、その言葉を聞いた周りの人はクスクス笑つて、ノベ
スが黙つた。

この時亮は思つた。

「ルルって意外に黒い。」

それから暫くの沈黙の後亮達は、東京ドームくらいの大きさの闘技場についた。

「ここが闘技場よ。」

ここで学園のイベントとが儀式をするの。最大収容人数は7万人よ。ここだったら何が召喚されても大丈夫でしょ？」

ルルが丁寧に亮に説明してくれた。闘技場の中に入ると中央にがたいのでかい全身毛むくじらの男が立っていた。恐らく召喚術の先生だろう。その人が亮達を確認すると叫んだ。

「ようおし！みんなこっちに集まれ！！」

みんながその男の元に寄るとその男は言った。

「よし！みんな集まったな！俺は召喚術の担当の教師だ。これからお前たちの使い魔を召喚してもらう。みんなこの時の事を楽しみにしていた奴は多いと思うが、真剣に聞いてくれ。これから使い魔を召喚するが、一つ注意をする事がある。

それは、使い魔を奴隷として使わないことだ。使い魔と言えどちゃんとした生物だ。だから、使い魔にもちゃんとした感情つてやつがある。もし使い魔を奴隷扱いにし続けていたら、いざという時に言うことを聞いてもらえなくなる。最悪の場合殺される。だからその事を肝に命じて、使い魔は自分のパートナーとして扱え。

以上だ。」

周りの生徒は真剣に先生の話聞いている。

「やり方は簡単だ。」

まず、あの魔法陣を見てください。」

先生はフィールドに描かれている一つの魔法陣を指差して言った。

「まず、あの魔法陣に手をつき全力で魔力を込めるんだ。

すると、お前達に合った召喚獣が出てくる。その時に使い魔との契約が成立し、契約者どうし会話が可能になる。つまり、第三者から使い魔との会話を見ると人間が独り言を言っているようにしか見えないって訳だ。

それじゃあ、ここに一列に並んでくれ。」

先生が亮の前に立ち、列を作るように指示した。なので、先生の目の前にいる亮は自動的に先頭になった。

「一番初めの人が失敗するのは嫌だよな」

亮は自分の力に心配していた。

「おい、リヨウ。羨ましいぞ。」

不意に後ろからノベスの声が聞こえた。亮の隣に座っていたノベスやルルらは最後の方に並んでいる。

「じゃあ、始めてくれ。」

亮は先生に指示され、魔法陣に魔力を込め始めた。

亮は多少魔力を抑えたが、まだ魔力が足りないようなので最大限に魔力を放出した。

気がつくと、雲一つ無かった空が曇り始め辺りが暗くなってきた。すると突然、魔法陣が輝き亮は白い光に包まれた。亮は目を開けてはいられず目を瞑っていたが光が収まるのを感じ目を開けると目の前に見覚えのある。赤い鱗のドラゴンがいた。

そのドラゴンは亮を見るや否や驚きを露わにして叫んだ。

リヨウ!?

『ジヨゾ!?!』

亮は驚きのあまりに叫んでしまった。

ジヨゾの言葉は亮にしか聞こえないのだが、亮の言葉は驚きのあまりに啞然としている教師や生徒達の耳に入っていた。

「ジヨゾ?」

不審に思った先生は、亮に尋ねた。

『え? あっ! ええっと、ジヨゾは突然思いついたこいつの名前です。』

亮はハッとして慌てて言って誤魔化した。

「そ、そうか。じゃあ、次。」

先生は亮の後ろに並んでいた呆然と立っている男子生徒に背中をそっと叩き指示した。

「すぐよな。リヨウの奴、初めっから最上級使い魔のドラゴン

なんかだしちゃってさ。しかも、四本指だぜ？
あれじゃあ、リヨウの次にやる人が可哀想じゃね〜か。」

ノベスは後ろにいる3人に話しかけた。竜の場合、指の本数はその竜の地位を表している。実際に召喚される竜は二本指が普通で、良くて三本。四本指はめったに見られない。亮のような王族クラスの五本指は歴史上召喚されたことがない。

「そう言えばそうよね〜。でも、リヨウ自身ドラゴンを召喚するなんて思っていなかっただろうししょうがないんじゃない？」

ルルがノベスに賛同するように言った。

「あつ、あの人（リヨウの次の人）はユニコーンみたいよ。
でも、結構上位使い魔なのに本人はあまり喜んではいないわね。可哀想。」

ミリーが亮の次の男子生徒を見て気の毒そうに言った。

そんな中、スヒルは亮とそのドラゴン、ジョゾを眺めて何か考え事をしていた。

で、何でリヨウがここにいるんだ？人間界に帰ったんじゃないのか？

ジョゾが召喚されていく使い魔達を眺めながら落ち着いた口調で聞いた。亮もジョゾと同じ方向を向いている。

『いや〜、人間界かと思ったら魔界に来ちゃったんだよね〜。そして、事の成り行きてやつでこの学校に入っちゃったって訳。』

亮が頭をカリカリ掻き笑いながら答えた。

はあく、それで召喚術の授業で俺が召喚されちゃったって訳か。

ジヨゾは溜め息を吐きながら言った。

『ははは、そう言うことだね。まあ、そんなに落ち込むな。そんなに俺の使い魔が嫌か？』

亮が聞くと、

別に、竜王子の使い魔って言うのはすごい栄誉的な事なんだけど…

面倒くさい。

『そうか、それはドンマイ。

まあ、これからもよろしくな。』

ああ、よろしく。

ジヨゾは憂鬱そうに答えた。

ところでリヨウ、お前自分が竜であることを誰にも言っていないだろうな？

「ああ、そのことは友達を含めて誰にも言っていない。けど、」

だけどうした？

ジヨゾがまじまじと迫ってきた。

「疑いを持たれている。いや、もう俺の正体の事を確信しているかもしれない。」

誰にだ？

亮はスヒルを見てジヨゾに合図をした。

あいつか？

ジヨゾはスヒルに気づいたようだ。

「ああ、昨夜あいつと少しあってな。」

そうか…

「でも、大丈夫だ。あいつは悪い奴じゃない。」

亮は念を押すように言ったが、ジヨゾはスヒルを睨みつけた。

「お、次はノベスの番かさて何が召喚されるのやら…」

ノベス？リヨウの友達か？

「うん。まあ、そんな感じかな。」

ジヨゾは納得したように頷いた。

「ハアアアア！」

ノベスは叫びながら全力で魔法陣に自分の魔力を込めた。

すると、みんなと同じように魔法陣が光り出し、光がノベスを包んだ。光が収まるとノベスの目の前にはグリフィンがいた。

グリフィンとは鷲の頭、翼、前足を持ち、かつライオンの尾や後ろ足を持つ魔物で獰猛「ドウモウ」と言える性格をしているが知能は低く、使い魔としてのランクも真ん中くらいだ。

それでも、良くてラットだと言われたノベスは大いに喜びはしゃいでいた。

うるさいぞ、人間。

ノベスがはしゃいでうるさくしていると、突然グリフィンが機嫌悪そうに言った。

「え？誰？」

ノベスの頭の中はグリフィンが召喚されたことに喜んでおり、契約者同士が会話できることすっかり忘れていた。

お前の目の前にいるだろう。

はあ、俺も堕ちたものだな。よりによってこんな馬鹿な人間と契約

することになるとはな。

ノベスのグリフィンが溜め息を吐きながら言った。ノベスは知能が低いグリフィンに、しかも会って間もない使い魔にいきなり馬鹿と言われて急に落ち込んだ。

「ノベス、意外と普通のが出たね。」

ミリーがグリフィンを見て言った。

「そうね。でも、ノベス早速落ち込んでいるわよ。」

ノベスを見てルルが言う。

「どうせ、早速グリフィンに馬鹿にされたんじゃない。」

機嫌の悪そうなグリフィンと落ち込んでいるノベスを見るとある程度想像はつく。

「グリフィンって言うのがある意味運が悪いね。グリフィンは人間を毛嫌いする習性があるから。」

ルルの言うのはその通りで、グリフィンは特に人間と馬を嫌う傾向がある。なので、グリフィンは最も人間になつかない使い魔なのだ。いつまでもノベスが魔法陣に手について落ち込んでおり、儀式の邪魔なのでミリーは物体浮遊でノベスを闘技場の隅に飛ばした。

「さて、今度は私ね。」

ミリーは声を弾ませながら言い、魔法陣に魔力を流し始めた。

ミリーもみんなと同じように光に包まれた。

光が消えるとミリーの前には羽飾りのついた黄金の兜、黄金の鎧を身にまとい、右手に長剣、左手に楯を構えた金髪で長身の美しい女性が立っていた。

「え…？」

ミリーは半ば口を開け、放心状態になっている。目の前の女性は魔物とはとても言い難く、神聖的な感じがした。

「ヴァルキリー！？」

ルルが不意に声を上げた。驚いていたのはこの二人だけでなく、それを見た者全員が驚いていた。

（亮も見ていたが彼女の事を知らないので特に驚きはしなかった）

ヴァルキリーとは、知の神、オーデインの僕「シモベ」であり、“戦死者を選定する血塗られた乙女”と言われている。

普通、オーデインの僕である時点で召喚される訳がないのだが、なぜかこういう結果になってしまった。

主よ。

ヴァルキリーは放心状態になっているミリーに声をかけた。

「え？あつ、何？」

不意に声をかけられミリーは混乱していた。

さっきからぼーっとしているが、何か喋らないのか？

「え、あつ、その、あなたの事を教えてくれる？」

いつもの調子に戻れないが、何とかまず知りたいことを聞いた。

我の名はフィア、見ての通りヴァルキリーだ。

「ヴァルキリーってオーディンの僕でしょ？何で使い魔として召喚できたの？」

ミリーは恐る恐る聞いてみた。

分からない。だが、我々ヴァルキリーは運命というものを信じる。私が主の使い魔になったことは元々そういう運命だったからだろう。

「そ、そう。分かったわ。」

ミリーは実際分からなかったのだが、後ろにまだルルとスヒルがいるので話を終わらせフィアを連れて魔法陣を出た。

「ミリーとあのヴァルキリー、何を話していたんだろう?」

ミリーが魔法陣から出てルルがスヒルに聞いた。

「さあな、後で聞けば分かるだろう。」

スヒルはそっけなく答えた。

「そうだね。」

じゃあ、行ってくるね。」

ルルはそいつって魔法陣に向かった。

ルルが魔法陣に立つとルルは深い深呼吸を一回して魔法陣に手をつき魔力を流し始めた。するとルルは光に包まれた。光が消えるとルルの目の前には水色の鱗を纏った一頭の竜がいた。

亮はジョゾとルルが光に包まれ、それが消えると同時に驚いた。

「マナ!? マナ!?」

ルルの目の前の水色の竜はマナだった。

【あれ?ここはどこ?】

マナはいきなり見慣れない所にきたのでかなり戸惑っている。

【マナ、落ち着け。お前は使い魔として人間に召喚されたんだ。】

ジヨゾはマナを落ち着けるように言う。マナは人間と一緒にいるジヨゾを見つけた。

【お前の目の前にいるのがお前の主人だ。その者に伝えたい言葉を念じてみる。そうすれば、お前の伝えたい事はちゃんと彼女に伝わる。】

ジヨゾはそれだけを言って静かに頷いた。マナも頷き返しルルと向かい合った。

その頃ルルは、自分がドラゴンを召喚したことに驚いていた。まさか自分が三本指のドラゴンを召喚するなど全く思っていなかったのである。ルルは啞然としたが、辺りを見回し焦っている目の前のドラゴンを見つめるだけだった。

あなたが私を召喚したのですか？

ルルはそのドラゴンに突然尋ねられた。気がつくとそのドラゴンから焦りの表情はほとんど消えていた。

「ええ、そうよ。私の名前はルル。これからよろしくね。」

ルルは焦らず穏やかに言っていたが、彼女の手は僅かに震えていた。

私の名前はマナと言います。これからよろしくお願いします。

ルルはマナの挨拶を聞くと安心したように一息吐いて、手の震えを

止めた。それからマナを連れて魔法陣から出た。

「さて、お！スヒルで最後か。期待しているがもう俺は驚かんぞ。」
先生が微笑しながら言った。

「最後は俺か、大丈夫だ。別に凄い奴を召喚させるつもりはない。」
スヒルはそう言いながら踏まれて消えかかった魔法陣に自分の魔力を注いだ。

魔法陣を覆っていた光が消えるとスヒルの目の前にまたしてもドラゴンが出現した。それは灰色の鱗に三本指の竜だった。

その時、スヒルは周りにいるルルのドラゴン、亮のドラゴン、そして亮から一斉に強い視線を感じた。

スヒルによって召喚された竜は辺りを見渡し、すぐに状況を判断したらしくスヒルに声をかけた。

僕の名前はテト。君が僕を召喚したの？

「ああ、そうだ。俺の名はスヒル。これからよろしく頼む。」

「よろしく。」

『ルルは、マナ。スヒルはテトか。まさか、俺の友達が友達を召喚するとはな。』

亮はスヒルが召喚したテトを見て言った。

良かったじゃないか。またあいつらに会えるようになるんだから

『ああ。』

ちょうどその時、

ゴーン、ゴーン、ゴーン

授業の終わりを知らせる学校の鐘が鳴った。

「よおーし！みんな終わったな。

それじゃあ、今日の授業はここまでだ。」

先生がそういうと周りの生徒は次々とその場を去っていった。

『次って、剣術の授業だっけ？』

亮が授業が終り、闘技場からの帰り道に言った。今現在使い魔は、五人とも引っ込めている。

「ええ、確か集合場所は武道場よ。」

亮の質問にルルが答えてくれた。だが、亮に武道場と言われても見ただけでもないし、場所すらも分からない。

「まっ、ついて行けばいいか。」

ノベスは、グリフィンに散々馬鹿に去れたのが珍しく無口になっており、ミリーはいまだに自分がヴァルキリーのフィアを召喚したことに驚いているのかこちらでも何も話そうとしない。スヒルは何やら考え事をしているらしく反応ゼロだ。

それから五人は誰も沈黙を破らずに歩き続け気づかぬ間に武道場に着いていた。

ゴーン、ゴーン、ゴーン
授業の始まりの鐘が鳴った。

生徒は武道場の床で体育座りをして前に立っている老いた男性教諭を見ている。

「さあ、授業を始めようかのお。
君達は今日初めて剣術を学ぶ訳じゃが、まず初めに魔器生成を行ってもらう。

儂の話が終わったらあそこから一人一つ魔法石を取りなさい。」

先生が鉄鉱石みたいな黒い光を放つ石の置いてある机を指差しながら言った。

そして心無し、外部からの感覚を全て断ち切るんじゃ。それができたらそれを維持しながら石に魔力を込めてみよ。さすれば、石は主らの魔力に反応し己に適した魔器に姿を変えるじやろう。

よし、以上じゃ。」

先生の話が終わるや否や生徒は立ち上がり机の上にある魔法石を取りに行った。

「誰か俺の石も持ってきて〜」

いつの間にか本調子に戻っているノベスが言った。

「嫌よ。自分で取ってきなさいよ。」

ミリーが断った。こちらも本調子に戻っている。

「じゃあ、じゃんけんで負けた奴が五人分の石を取りに行くってのは？」

「それなら良いわよ。ね？ルル。」

「ええ、良いわよ。」

「良いだろう。」

『俺はパ…』

亮はじゃんけんに信じられないほど弱い。だから、パスしようとした。

が…

「」「じゃんけんぽい」「」「」

出してしまった。

「トホホ…」

五人分の魔法石を持ってきたのは最初に言い出したノベスだった。亮は奇跡的にじゃんけんに勝っていたのだ。いや、厳密に言うと奇跡というより当然だった。実はノベスはじゃんけんに勝ったことすらなかったのだ。しかも、それよりも致命的なことに、自分がじゃんけんで勝ったことがないということを皮肉な事にノベス自身気づいていないのだ。ノベスの連敗記録はどこまで続くのであろうか。

亮はノベスから石を受け取ると早速目を瞑って心を無にし、それが出来たところで魔力を流した。

すると亮は、手を伝って魔法石が変形していくのを感じた。亮は石の変化が止まったと感じると目を開けた。

亮が目を開けると手には青白い光を放つ剣が握られていた。柄の部分には二頭の竜の絵が彫られており、鞘の部分には小さく“牙竜剣”と金色の字で書かれていた。

亮はその牙竜剣を眺めていた。

ふと横を見ると、スヒルがおりその手には昨夜の時の物とは違う双剣が握られていた。そして、ルルの手には長弓とその矢、ミリーの手には死神が持っているような巨大な鎌、ノベスの手には巨大な鎚が握られていた。

他にも槍を持つ者や、巨大な斧を持つ者、ヌンチャクを持つ者など様々いた。

「うむ、皆魔器を生成したようじゃな。付け足しておくが、主らの魔器にはどこかにその魔器の名前が書いてあるはずじゃ。」

それを見つけたら、心の中で消えろと念じてみい。さすれば、魔器を消すことができる。その反対も可能じゃ。」

亮は半信半疑でその一連の動きをやってみた。すると見事に魔器を消したり、現れさせたりすることができた。

「それじゃあ、こんなものでいいかのう。

よし。じゃあ、鐘が鳴るまで素振りでも何でも好きにするがよい。しかし、危ないことはするでないぞ。」

先生は長く白い髭を撫でながら言った。

その言葉と同時に生徒達は真面目に素振りをしたり、自分の魔器を自慢してたりしていた。

「おゝい。リヨウ。勝負しようぜ?」

早速ノベスがハエのごとく寄ってきた。

『勝負って、おい!それって危ない事に入るんじゃないか?しかも、なんで俺?』

「ん?気分だ。それに先生がアレだから。」

そう言つてノベスは武道場の角にいる口を半開きで上を向きながら椅子で軀を掻いて寝ている先生を指した。

「おい、この世界は授業中に先生が寝てていいのかよ!」

「あゝ、なるほどね。まあ、別にやってもいいか。」

亮は自分の力を試したい事もあり、昔浩治や拓海とよくチャンバラごっこをして遊んだ為それなりに自信があつたのでその誘いに乗った。

「ダメよ。先生が見てないからってそんな危ないことをしちゃあ、もし事故でも起こつたら先生の責任になるのよ。」

ここで優等生のルルが早速止めに入った。

「大丈夫だつて、怪我をしない程度にやるんだからさ。さっ、やろうぜリョウ。」

ノベスはルルの忠告を無視して言い、魔器を生成した。

「担任に言いつけるわよ。」

ルルのその言葉はノベスの心を貫いた。

「う…、リョウ、止めよつか。」

ノベスの表情が急に焦り顔になり言った。

『ああ。』

亮はノベスと闘いたいのだが、自分に飛び火するのは真っ平御免だ。

亮は何もする事がないのでただ牙竜剣の素振りをするだけだった。

ふと、横を見るとスヒルが双剣で素早く次々と技をこなしている。

「そういえば、昨夜も双剣を使っていたな」

亮は手を止めスヒルの繰り出す技に長い間見とれていた。

ゴーン、ゴーン、ゴーン

亮が見とれているうちに授業の終わりを告げる鐘が鳴った。

その後亮は基本魔術、錬金術、魔法歴の授業をこなしていった。

亮は基本魔術は竜界で学習していたため授業には難なくついていったが錬金術や魔法歴はさっぱりだった。ただ、意味の分からない用語が次々と出てきてしかも、以前と違って90分授業なので亮にとっては地獄としか言いようがない。

五時限目の魔法歴の授業が終わったと同時に亮は机にだらしく伏せた。

「これからこうゆづのが毎日あるのか。不登校になりそう……。みんなから遅れている分勉強しないとな。」

亮はそんな事を思いながら帰りのHRをやり過ごした。

第九章 お披露目会

学校が終わる頃、時計の針は五時を指していた。

「リヨウ。」

隣にいるルルが話しかけて来た。後にはミリーやスヒル、ノベスがいる。

「広場で使い魔の御披露目会をしない？この五人で、」

「使い魔の御披露目会か」。そういえば、テトとマナにまだ何も言っていない。

『ああ、良いぞ。』

亮はテト、マナ目的で誘いに乗った。

「やったー。実はリヨウの使い魔もう一回見てみたかったのよね。じゃあ、行きましょう。」

ミリーが嬉しそうに言って、みんなを手招きし、教室から出て行った。

そのあとに亮達はついて行った。ただ、ノベスは御披露目会には参加するが、あまり乗る気でないらしい。恐らく、自分の使い魔に馬鹿にされるのが嫌なのだろう。

広場は学園の中央に位置しており広さも闘技場くらいに広く、芝生の中にレンガの敷き詰めた道があり、中央には一つの巨大な噴水と木製のベンチがいくつもおいてある。五人は広場の中央部。つまり噴水付近に集まり、みんな一緒に使い魔を召喚した。

学園の広場に三頭の竜と一頭のグリフィン、一人のヴァルキリーが現れた。

周りから見るとドラゴン三頭だけでもかなり迫力ある見ものなのだが、それに加えグリフィンとヴァルキリーまでもいるのだからかなりの見物だろう。

何の用で呼んだんだ？

亮に召喚されたジョゾは周りを見渡し亮に聞いた。

『使い魔の御披露目会だよ。』

それより、テトとマナには俺の事言ったか？』

後半部分はルル達に聞かれるとまずいので小さく囁く「ササヤク」ように言った。

いや、ギガ様とルーマン様には言ったがテト達には言っていない。

『そうか。』

「それじゃあ、私から紹介するね。」

ミリーが亮達の前で張り切って言った。

「この子はヴァルキリーのフィア。ちょっと、キビキビしたところがあるけど良い子だし、強いわよ。これからよろしくね。」

ミリーに紹介され、フィアは頭を軽くペコリと下げおじぎをして下がった。

「じゃあ、次俺な。」

ミリーに代わって今度はノベスが一步前に出た。

「こいつはグリフィンのバグ。」

口が悪くて俺をいつも馬鹿にするが、こいつの良いところは……まあ、よろしく。」

ノベスは途中、口がごもっていたが誤魔化した。ノベスと代わって前に出たのはスヒルだった。

「こいつは、ウィンドドラゴンのテトだ。接近戦を得意としているらしい。」

よろしく頼む。」

スヒルの短い紹介を終えるとテトは軽く頭を下げた。

「今度は私ね。この子はウォータードラゴンのマナ。初めはなかなか馴染めなかったけど今ではよく話す私のパートナーよ。」

マナは主人に誉められて嬉しいのか顔を少し赤らめておじぎをした。

『最後は俺か。』

かっこいい紹介を期待しているぞ。

ジヨゾが悪戯に笑いながら言った。

「かっこいい紹介か」

亮は紹介の内容を考えながら前に出た。

『ええと、こいつはファイアドラゴンのジヨゾ。よろしく。』

みじか！

ジヨゾは礼を忘れて亮を睨みつけた。

『悪い。よく考えてみたら、お前のかっこいい所見つかなかった。』

亮は苦笑いをし、詫びるように言った。それを聞いたジヨゾはため息を吐き深く落ち込んでいた。

「これでみんな紹介終わったわね。
じゃあ、ノベスジュース買ってきて。」

ミリーが言った。

「なんで俺？」

「あんただけじゃないよ。お金は後で出すから。私とスヒルは何か食べ物買ってくるから、亮とルルはここで使い魔達を見てて。」

さ、行きましょ、スヒル。」

「ああ。」

どうやら、ミリーはここでパーティーでもするつもりらしい。ミリーはテキパキと指示すると、スヒルを連れてどこかに行ってしまった。ノベスもミリーの奢りという事もあって嬉しそうに走って飲み物を買いに行ってしまった。

広場に二人が残っているのは亮とルルだけだ。広場の周りの生徒は五体の使い魔を見ている。

「私、ちょっとお手洗いに行ってくる。」

ルルはそう言って行ってしまう、亮一人になってしまった。

そんな中、テトとマナが竜語で何やら話している。

【……って訳でさ、いろいろ大変なのよ。でも、私ミリーの使い魔になれて良かった。】

【ふーん、僕の主人のスヒルもあんまり話とかしないけど、あの人にならついていきたいと思う。】

どうやら、自分の主人についての話らしい。

『でも、あいつギルドで魔物退治とかしているんだぞ。』

亮はさり気なく会話に参加。

【え！？そうなの？それじゃあ、僕も竜族と闘う可能性が高いってことか？】

つて、え！？君、僕たちの言葉分かるの？】

テトは途中、亮が自分たちの竜語を理解していたことに気づき、急に驚きの表情をして言った。マナもテトと同じように驚いている。

『匂いを嗅いでみる。』

亮はにやついて言った。

亮に言われて二頭は亮に近づいて匂いを嗅いだ。

【え、もしかしてリヨウ？】

マナが匂いで気付いたようだ。

『やっと、気付いたか。』

つて、いうよりお前たち俺がルル達からリヨウって呼ばれてたの気付いてたろ。』

確かにこの二人には亮の人間の姿を見せていないが名前で分かる筈である。

【いや、それはまた同姓同名の別人かと思ってた。】

テトが言うとマナも深く頷いた。

【それより、なんで魔界にいるんだい？人間界に帰ったんじゃない？】
驚きを隠せないテトが亮に聞いた。

『まあ、それは話せば長くなるからそこで寝ているジヨゾに聞いてくれ。』

亮は丸くなって寝ているジヨゾを指差して言った。

【そういえば、リヨウはジヨゾ様を召喚したのね。
リヨウの使い魔になれるなんて羨ましいな。】

マナは寝ているジヨゾを羨まし気な目で見て言った。

『でも、スヒルやマナとは仲が良いから、また一緒になれる時もあるだろう。』

【ああ、そうだね。】

『お、ノベスが帰ってきたみたいだぞ。じゃあ、また今度話そう。
俺の正体については誰にも話すなよ。』

【ああ。分かった。】

【ええ。】

ノベスの匂いを察知した亮はそう言ってテトとマナから離れた。
「お待たせ。ジューズ買ってきたぜ！あれ、ルルは？」

ノベスは全速力で走って来たのか荒息を掻いている。

『トイレに行った。』

「そっか、早くミリー達も帰って来ないかな。」

ノベスの息はまだ荒い。ノベスは喉が渴いたのかミリー達の帰りをまだかまだかと待っている。

「お待たせ。あつ、ノベス戻っていたんだ。」

ノベスの次に帰ってきたのはルルだ。

「なあ、リヨウ。このジュース飲んでいいと思う。」

ノベスは目の前にあるジュースを美味しそうに見つめた。

『いや、ミリーのお金で買ったんだからミリー達が戻ってからの方が良さそう。』

亮は苦笑しながら言った。それから、ノベスは購買のある方向をじっと見つめ始めた。その頃ルルはマナと何やら話しており、残りの使い魔は寝ている。

「お、きたきた。」

ノベスが一点を見つめ騒いでいる。亮がノベスの視線の先を見ると両手いっぱい袋を下げて歩いてくるミリーとスヒルの姿があった。

『また、よくあんなに買ったな。五人じゃ食べきれないぞ。』

亮が苦笑しながら言った。

「大丈夫よ。あのくらいなら足りないくらいだと思うわ。」

『え！？』

もしかして、使い魔達も食べるのか？』

「ううん、使い魔は人間の物を食べないわ。」

ルルは首を横に振って言った。

『じゃあ、誰が食べるんだ？』

「彼女よ。」

ルルがミリーに視線を移して言った。

『え……』

亮は絶句した。ミリーは小柄で全然太ってなどおらず、むしろスリムな体型だ誰がどう見ても大食いには見えないだろう。

「後で分かるわ。」

『……』

亮とルルが話しているうちにミリー達が亮の元へ辿り着いた。既に、ノベスは犬のようになっており、ご主人様の許しを待っている。

「さっ、食べましょ。」

ルルがそう言った瞬間にノベスはじつと狙っていた炭酸ジュースを手に取り蓋を開けた。あとの四人は紅茶やコーヒーである。

すると、

シュワ―

「わー!？」

ノベスがジュースを開けると缶から空気が漏れる音と同時に中身が噴き出した。

「ノベス、何やってんのよ！」

ルルがもったいないと言わんばかりにノベスに叫んだ。

ノベスが持っている缶の中にはほとんど中身は入っておらず、本来の十分の一程しか残っていなかった。

「お、俺のジュースが…」

『お前が炭酸ジュースを買ったのに全力で走って来るからだろ。』

亮が呆然としているノベスに呆れて言ったが、ノベスからは返事になかった。

ノベスはため息を吐きながら、ルルから借りたハンカチで自分の衣服を拭き、残った炭酸の抜けた炭酸ジュースを無言で飲み干した。そんなノベスをよそにミリーは目の前の獲物に次々と食らいつき、ルルとスヒルは静かに食べ物を食べ、亮は次々に口に詰め込むミリーを見て固まっております、ノベスを氣遣う者など誰もいなかった。

10分後、目の前に山のようにあつた食べ物の四分の三はミリーの胃の中に収まり、あとは四人の胃の中に収まった。

「あゝ、食べた食べた。さあ、食事も終わったこと出し使い魔の御披露目会も終わりにしましょうか」

ミリーはそう言って、フィアを引つ込めた。

食べたと言ってもミリーを見て呆然としていた亮や、ジュースをこぼして衣服を拭いていたノベスはほとんど食べていない。

ミリーが言うのと同時に他の五人も自分の使い魔を引つ込めた。

亮が辺りを見回すと西の山に半分没した太陽が見える。先ほどまで広場にいた生徒は次々と寮に戻って行く。

「さあ、帰ろうぜ。」

ノベスが爪楊枝「ツマヨウジ」を口に加えながら言った。

「それぞれの用事もあることだしな。」

スヒルが亮を睨みつけて言った。

亮はその目を見て、今朝のことを思い出した。

食べ物の容器を片付け、食い足りないミリーとノベスは学食にルルと亮、そしてスヒルは寮に向かった。

『ミリーのやつあんなに食っておいてまだ食うのか。』

沈黙の帰り道、初めに亮が口を開いた。

第十章 体験授業

『ミリーのやつあんなに食っておいてまだ食うのか。』

沈黙の帰り道、初めに亮が口を開いた。

「だから、言っただでしょ。足りない、って」

ルルが微笑しながら言った。

『確かに言っただけど、まさかまだ食べるとは…』

「彼女の胃袋はブラックホールだからね。」

ルルの微笑みにつられて亮も微笑んだ。

二人が話しているうちに三人は亮についた。ルルは寮に入るや否や亮とスヒルに別れを告げ移転して行ってしまった。

「リョウ、今朝のことを覚えているか？」

ここでスヒルがやっと口を開いた。

『ああ、覚えているとも。』

お前の部屋の前まで連れていってくれ。』

亮が言うとスヒルは静かに頷き、亮の肩に手をあて、移転した。

移転先に着くと、目の前に1991と金色の文字で刻まれたドアの

前に立っていた。

「ここが俺の部屋だ。」

スヒルはそう言ってドアに手をあて、ドアを開け中に入って行った。亮もスヒルのあとに続き部屋に入ると、リビングがあった。スヒルは寮に入ってから家具の移動などをしていないらしく、家具の配置は亮の部屋と同じだ。

「掛けてくれ」

スヒルはソファーに腰を掛け、亮に向かい側のソファーに座るように言った。亮は言われるままにソファーに腰を掛けた。

『話って言うのは何だ?』

亮は分かっていたが、これを言わないと永遠に沈黙が続くと考えたので取り敢えず聞いた。

「もったいぶらず率直に聞こう。」

スヒルが柔らかい口調で言った。

「お前は人間か?」

普通の人間にこんな質問をしたら相手は怒るか質問者を馬鹿にするだろう。だが、亮の場合は別だ。

『…………』

「初めて会って握手をした時、お前の中から人間とは別の何かまた異質的なものを感じたんだ。」

『……』

「それに昨夜、俺は確かにドラゴンと闘った。あれは夢じゃない。そのドラゴンとお前とが同じ感じがしたんだ。」

つまり、お前は……」

スヒルが何か言いかけた時、

『そう、お前が闘ったと言う昨夜のドラゴンだ。』

そうでなければお前は昨夜の時点で死んでいただろう。』

亮はスヒルがそこまで分かっている時点で言い逃れできないことを悟り、自ら告白した。

「やっぱり、そうだったのか……」

スヒルは表情ひとつ変えずに言い、話を続けた。

「だが、一つ分らないことがある。

昨夜のお前の最後の一撃は確実に俺に当たった。そうでないにしてもあの高さから落ちては無事ではいられないはずだ。

それなのに、なぜ俺は生きている？」

『ああ、確かに最後のファイアボールはお前に命中した。だが、俺

は炎の温度を自由に变化させることが出来るんだ。だからあの時、お前に当たったファイアボールはただの見せかけだ。

その時、お前は都合よく気を失ってくれた。そこで俺が落下しているお前に物体浮遊魔法で地面への直撃を避けた。と言う訳だ。』

亮がスヒルに昨夜の経緯を微笑しながら説明した。

「そういうことか…」

『で、真実を知ったお前はこれからどうするつもりだ？

やっぱり、俺を魔物として殺すのか？』

亮は急に真顔になって聞いた。亮は既に戦闘態勢になっている。

「フッ

安心しろ。俺はお前を魔物としてではなく人間…

いや、友としてみている。他のやつにも言つつもりもない。少なくともお前は俺の任務の対象の竜ではないだろう。」

スヒルは鼻で息を一息吐き、微笑して答えた。

『そうか…

ありがとう。』

気づくと亮の目から一粒の涙が頬をつたって流れ落ちた。

亮は初めからスヒルが自分を殺そうとは思っていたが、まさかスヒルの口から友という言葉が出るとは思わなかったのである。

「お前の事を知っているやつは俺以外に誰がいる？」

「人間にはお前以外誰も知らないはずだ。」

人間以外なら、お前の使い魔、テトとルルのマナ。そして、俺の使い魔、ジョゾが知っている。そいつらとは竜界からの仲だな。」

「そうか。」

「それじゃあ、話は終わるか。帰って良いか？」

亮はソファアから腰を上げようとすると、

「待ってくれ。」

亮はスヒルに引き止められ、動きを止めた。

「何だ。」

「俺がこの事実を知ってもお前とはこれからも友達として接していくつもりだ。」

だから、お前も今まで通りに接してくれないか？」

スヒルが真剣な表情で言った。

「お前がそんな事を言ってくれる奴だとは思ってもみなかったよ。勿論だ。これからはずっと友達でいよう。」

亮はとても嬉しくなり、涙と共に微笑みも出た。

亮はそのまま、スヒルの部屋をあとにした。

スヒルの部屋をあとにした亮は自分の部屋に移り、まだ物足りない空腹感を簡単な亮の手料理で賄い、勉強に移った。

時計を見るとまだ七時半だった。

「七時半か、勉強しないと。授業の遅れを取り戻さないといけなしな。」

亮はそれから深夜二時まで竜界で目覚めた記憶力をフル活用し、部屋にある魔導書を引っ張り出して暗記した。

そして、亮はそれを何日も続けクラスのみんなに追いつこうとした。

そして、十月の定期試験。この世界も人間界と同じ様に定期試験というものがあるらしい。

亮はその試験で今までの努力が実ったのか、テストで平均点を優に超え学力ではクラスの上位に立つことができた。

また、実技も今では剣術の授業でスヒルには劣るが、クラスNO.2のミリーに打ち勝つことが出来る程であった。

そんな亮は今では学力の面でクラスのレベルに達したことから、ただの勉強だけでなく剣術にも打ち込むようになり、亮は学校が終わると、学校の剣術訓練場でスヒルを誘い日々剣術の訓練に打ち込むのであった。

だが、スヒルは全く齒が立たなかった。
この間に成長したのは亮だけではない。

性格は相変わらずなのだが、ノベスも亮が来てから遅刻、居眠りをしないようになり、勉強に打ち込むようになった。そのお陰からかノベスの学力は最下位から一気に真ん中にまで追いつき、剣術ではルルを下し四位に入る程であった。だが、相変わらず使い魔には馬鹿にされている。

〓〓定期試験返却の翌日のHR〓〓

今日から基本魔術は課程を修了したので、全て属性魔術に入れ替わった。

属性魔術は、それぞれの属性の魔法を学ぶ授業で、各属性別々に授業をする。

だが、問題は無属性のスヒルと亮で、属性魔術をほぼ完璧に扱えるスヒルは大丈夫なのだが、全く無知な亮が問題だった。

結局、自分の取りたい属性の授業を受け不足分は補修か自学習ということになった。

「実は明日、授業でギルドの体験任務を行う。

ギルドの任務内容は基本的狩りになる。まあ、狩りと言ってもウルフなどの下級魔だがな。任務は安全の為、五人チームで行う。だから、これからそのチームを作ってくれ。

だが、チームが強いとそれなりに難しい任務を渡すぞ。」

担任は最後に付け足して言った。

担任が話を終わらせると、クラスは一気に五月蠅くなった。

「リョウ、ルル一緒に組もうぜ。」

ノベスがミリーとスヒルを引き連れて亮とルルをチームに誘った。

『おう』

「ええ」

亮とルルはその誘いに乗り、チームは亮、ルル、ミリー、ノベス、スヒルとなった。

「結局、いつものグループになっちゃったわね。」

ミリーは嬉しそうに微笑みながら言った。

『しょうがないだろ。他に誰も誘ってくれないんだから。』

亮がそう言うともみんなが微かに笑った。

「それ、言ってる。」

それはこの五人が嫌われている訳ではなく、ただ単にクラスの上（特にスヒル）と組むと任務内容が面倒くさくなるのでみんな避けていただけだ。

「よし、決まったな。」

じゃあ、チームの代表者は前に来い。」

担任はある程度チームが決まったところで言った。

「代表者？」

じゃあ、俺だな。」

調子に乗っているノベスが教室の前に飛び出そうとした時、、

「う、ぐはあ」

ノベスの悲鳴声が聞こえた。亮が振り返って見ると、ノベスの背後にいたミリーが彼の首を締め付け、ノベスの前にいたルルが彼の体を押さえつけている。

「リョウ、早く行って！」

ミリーが五人の中で一番前にいる亮に鋭い目つきで言った。

「え？あ、ああ。」

亮はこうゆうのをノベスにやらしてはろくなことが無いということを感じ出し、ミリーに言われるままに前に出た。それでもノベスはまだもがいている。

担任は代表者のチームのメンバーを見てから、封筒を渡している。

「やっぱり、そのメンバーか、こういう事を予想してお前たちにち

「ようどいい任務を見つけたぞ。」

担任が不気味ににやつきながら、言った。亮はその封筒を恐る恐る受け取りルル達の元へ戻り、ギルドに詳しいスヒルに封筒を渡した。

「ハアハア、スヒル。どういう任務だった。」

ノベスを取り押さえるのに必死だったミリーが尋ねた。

「ああ、大した任務じゃない。簡単な任務だ」

スヒルは平然とした表情で答えた。

「そう、それなら大丈夫ね。」

ミリーはホッと安心して言った。だが、ルルは何だか納得がいかないようだ。

「ねえ、スヒル。」

大した任務じゃない。って誰が基準？」

「それは勿論、俺に決まっているだろう。」

「『『『え……』』』」

四人の表情が一瞬で曇り、空気も変わった。

「その任務って……」

ミリーが恐る恐る聞いた。

「ああ。最近、西の山でケルベロスが増えすぎて人間を襲うらしい。だから、そのケルベロスを何頭か退治して欲しい。というAランクの任務だ。」

スヒルは軽く言ったが、他の四人には重く聞こえた。

「マジかよ。俺まだ死にたくないぜ。」

「俺もだ。」

「大丈夫だ。ケルベロスなど問題にするような相手ではない。それに四人もいれば尚更だろう。」

「え、ちょっと待って。今、四人って言った？」

スヒルの発言に違和感を感じたルルが、もしかと思ひスヒルに確認した。

「ああ、言っていなかったか。」

明日。俺、ギルドの任務で授業に出れないんだ。」

スヒルが言った瞬間、四人の呼吸が止まった。

「う、嘘だろ？」

ノベスは狼狽えるように言った。

「俺が嘘をつくように思えるか？」

スヒルは首を傾げ「カシゲ」て言った。

「まあ。今、嘆いても仕方ないから、明日の今頃無事に生きていることを祈りましょう。」

ルルは一息吐いて言った。

「よし。これでいいな。明日は、教室に来ないでそのまま任地へ赴いてくれ。じゃあ、今日のところはこれで解散。」

担任の声と同時に生徒が次々と席を離れ教室をでていった。

「じゃあ、明日は朝九時に広場に集合ね。」

ミリーの提案に三人が同意した。

〓翌日、広場〓

「おう、亮。
おはよう。」

亮が広場に姿を現すとノベスが元気な声で挨拶をかけてきた。

『ああ、おはよう。』

亮が来たときにはもう、ノベスの他、ミリーやルルも集まっていた。

「揃ったわね。」

それじゃあ、行きますか。」

ミリーが言つと

「俺、まだ逝きたくないな」

「何言っているのよ。しょうがないでしょ。ノベスが封筒を取りに行つてたら、ドラゴンの退治だったかもしれないんだからそれよかマシよ。」

ばやいているノベスにミリーが声を張つて言つた。

山までの移動手段は徒歩だ。本来なら、使い魔を使つて行けばすぐに行けるのだが、今回は学校からの命令で使い魔は緊急時以外使用禁止となっている。

くくラウス、西部の山くく

ラウスの西に位置するこの山は亮が現れた南の山に比べ獰猛な魔物が多く、また自然も深い。なので、常に周りを警戒する必要がある。

「!?!?!」

四人が山の奥へ突き進んで行くと亮の嗅覚が反応した。

亮は足を止めその場に立ち止まった。

「どつしたの？亮。」

不審に思つたルルが亮に尋ねた

『囲まれた……』

亮が呟くように言った。

「え……」

ルルは驚いて辺りを見渡したが一見変わったところはない。だが、目に魔力を集中させてもう一度見ると、暗い茂みの中から赤く光る二つの目が四人を睨みつけ取り囲んでいることに気がついた。

「みんな、魔器を出して囲まれているわ。多分ウルフよ。」

ルルは大きな声で言った。

その声と共に四人は次々に魔器を呼び出した。

四人が魔器を装備したちょうどその時、一頭のウルフの遠吠えと同時に四方八方からウルフが飛び出し、四人を襲った。

ザシュ、

キャン！

亮がウルフを斬る毎にウルフの断末魔が聞こえる。亮も青い返り血を浴びるが、そこに感情を付け入る隙もなく次々とウルフが飛びかかってくる。

亮は魔物を殺すのはこれで三回目だが、他の三人は初めてらしくいつもとはまるで別人のような顔をしてやけくそに魔器を振り回していた。（ルルの場合は矢を乱射。）

「くそ、どんだけ数があるんだよ！

これじゃあ、ケルベロスと闘う前にくたばっちまう。」

ノベスは悲鳴のように叫んでいたが今のところ無傷だ。しかし、ノベスだけでなくみんなの息は確実に荒くなっている。

亮が十頭目のウルフを斬ったときここでやっと恐れをなしたのか、ウルフ達は一斉に引き揚げていった。

「ふう。助かった。死ぬかと思った。」

ノベスがその場に寝ところだった。だが、辺りはウルフの死骸があちこちにあり、しかも生臭い血の臭いが立ちこめている。

「ええ、いくら魔物と言えど生き物。それを殺すのはあまりいい気がしないね。」

ルルは顔や衣服についた返り血を拭きながら言った。
「そうね。」

ミリーも息を荒くしながら小さく頷き言った。

「ちょっと、ここで休憩しようぜ。もう、体力がヤバい。」

ノベスが地面に仰向けに寝ころがりながら言った。

「私も疲れた。」

ミリーもその場で座り込んでしまった。

「じゃあ、しばらくここで休憩しましょ。」

『ああ』

ルルの提案にみんなが賛成し休憩をとることとなった。

血のついた服は基本魔法で綺麗にした。だが、ウルフの死骸が周りに散らばっている中では身体的に休まっても、精神的には休まらない。

それでも、体の疲れをとるためにノベスは寝ところがり、亮、ルル、ミリーはその場に座り込んでいた。

そしてしばらくの間、四人は無言でいたが、もうしばらくすると雑談で賑わっていた。だが、その雑談もウルフの血の臭いから腐敗臭になるにつれ会話も減って行った。

『そろそろ、行くか。』

亮が立ち上がると、三人も立ち上がった。

「はあ、また探し歩くのか。面倒くさいな」

ノベスが身支度をしながらぐちぐち言う。

『仕方ないだろ。相手にとっては俺達の都合なんか知りもしない…』

ノベス！危ない！』

とつさに亮はノベスに飛び蹴りを食らわした。

「ぶはあっ」

亮に蹴られてノベスは吹っ飛んだ。

「なにすんだよ、リヨウ！」

地面から起き上がったノベスは自分を見ずに茂み一点を睨んでいる
亮に怒声を散らした。

『死ぬよかマシだろう。』

ノベスはこの時になってノベスが立っていた傍にあった木が炎をあげて燃えていることに気がついた。

「え…？」

ルルやミリーもあまりに突然のことだったので何が何だか分からないようである。

すると、亮が睨んでいた茂みの中から三つの頭を持つち、長い尻尾をつけた大型の犬が出てきた。

「ケルベロスよ！」

ルルはとっさに叫んだ。

「ちっ、ウルフの腐敗臭で鼻が利かなかったか。」

亮は舌打ちをすると持っていた剣を強く握り締めた。

すると、反対側からも、右からも、左からもケルベロスが出てきた。
全部で七頭だ。

「何で？何で一氣にこんなにケルベロスが出てきているのよ。ケルベロスって普通、単独行動でしょ。」

ミリーはヒステリックになりかけている。

「ええ、でも侵入者を退治する時は協力して行動するわ。」

ルルの声は落ち着いていたが、体は確実に震えている。

『ランス！』

亮は手を一頭のケルベロスに向け、火属性魔法で先制攻撃を仕掛けようとした。

すると、亮の手から炎が飛び出した。これは昨日習ったばかりのレベルが低い火属性魔法だ。

そのためか、飛び出した炎には勢いがなく、目標のケルベロスは軽々と横に飛び亮の攻撃を避けてしまった。

「やはり、魔法攻撃はまだ無理か。」

亮は一息吐いてから攻撃を避けたケルベロスに切りかかった。

亮とケルベロスが闘っている時、他の三人も他のケルベロスと戦闘になっていた。

ノベスは叫びながら、鎚を、ルルは時折、風魔法を放ちながら近距離戦に苦手な魔器の弓矢をしまい店で購入した短剣を、ミリーは巨大な鎌を振り回してる。みんな、ケルベロスに苦戦しているようだ。

ケルベロスも三つの頭から次々に炎を吐き、敵を噛みちぎらんとばかりに大きな口を開け襲いかかってくる。

『ランス』

亮はもう一度ケルベロスに向かって魔法攻撃をしたが、やはりケルベロスは横に飛び攻撃を避ける。

だが、それが亮の狙いだった。

亮はその頃合いを見計らい、魔法攻撃直後、亮はケルベロスの着地点を割り出しそこに目にも止まらない速さで突進した。

ケルベロスは亮の読み通りに着地し、その直後、亮は竜牙剣を右から左に大きく振り、ケルベロスの三つの首を順に跳ねた。すると、頭を失ったケルベロスは三つの切り口から青い血を勢い良く吹き出し、胴が倒れた。

「やった！」

亮は心で叫んだが、言葉で叫ぶ余裕はなかった。

残った二頭が同時に攻撃してきたからである。

二頭のケルベロスは十字方向に火を吐いた。この場合、横にも縦にも避けられないので亮は高くジャンプした。だが、上に高く跳ぶことはかなり危険だ。

シュン。バチン！

『ぐはっ』

亮が跳んでいる無防備の間に一頭のケルベロスが亮に飛びかかり長い尻尾を鞭のようにしならせて亮に叩きつけた。

亮は鞭に叩きつけられ、さらにバランスを崩し地面にも叩きつけられた。

更に、もう一頭がとどめを刺そうとケルベロスが亮に飛びついた。

だがこの時、亮に功を奏したのは魔器を離さなかったことだ。

亮はとつさに竜牙剣をケルベロスの大きく開いた真ん中の口に突き刺した。その剣は、頭から腹部までを貫き、その直後、残った二つの頭が断末魔を上げて倒れた。

ちょうどその頃、ノベスと闘っていたケルベロスの残った頭にノベスの巨大な鎚が直撃し、そのケルベロスは息絶えた。

だが、ノベスもケルベロスに噛まれたのか、至る所から出血してまた、所々に火傷の痕があり木にもたれ掛かって座り込んで気絶している。

そこに亮に尻尾で攻撃をした先程のケルベロスがハイエナの如く忍び寄っていく。

亮はそのケルベロスに切りかかる。だが、ケルベロスはそれに気が付き、それをかわす。ケルベロスは目標をノベスから亮に切り替え、亮に火を吐く。亮はその攻撃を魔器で防いだり、かわしながらケルベロスに再び斬りつけた。

ギヤアアア

ケルベロスが叫びあげる、急所は外れたが左前足を切り落とす事は

できた。ケルベロスは三本足でバランスを保ちながら、亮に向けて炎を乱射する。

だが、これがそのケルベロスにとって最後の攻撃となった。亮は炎を避けながら再びケルベロスに急接近し、ケルベロスを縦に二分した。ケルベロスは断末魔を上げる隙もなく息絶えた。

その頃、ルルとミリーはやっと相手のケルベロスを倒した。だが、二人は無傷ではなく、ノベスと同様、あちこちに傷跡や火傷があった。特にルルは魔力の消費が激しく、魔量が乏しくなっていた。

ミリーは自ら負傷していながら、ルルを水属性の魔法で治療を始め、亮も同じ魔法を使いノベスの治療にあたった。

見たところ、ノベスの傷跡はそれほど深いものでなく、また急所も全て外れていた。十分もすると自分の健闘ぶりをみんなに自慢するほどだった。

だが、問題はルルの方で、急所は外れていたもののいくつか深い傷がある。しかも、魔量も少ない。脈拍、呼吸はあるのだが意識がない状態だった。

亮はミリーと治療を交代し、自分の魔力の一部をルルに分け与えた。

「これで魔力の心配はいらないな。問題は傷か」

亮やミリーが会得している水属性の治療系は簡単な魔法で深手の傷にはあまり効果がない。

『仕方ない。ジョゾで学園まで運ぼう。』

「ええ、頼むわ。」

ミリーは心配そうな顔をしながら頷き言った。

その後、亮はジョゾを召喚し、重傷のルルと付き添いとしてミリーをジョゾの背に乗せ、学園へ向かわせた。

『さてと、俺たちも帰るとするか。』

「そうだな。帰ってスヒルやクラスの奴らに俺の健闘ぶりを自慢してやろう。」

ノベスにはやつきながら言った。

『スヒルには言う必要ないだろう。』

「え！？」

『もう、出てきていいんじゃないか？スヒル。』

亮が言うとノベスの傍の木の上から何かが飛び降りた。

「スヒル！？」

ノベスは目を丸くさせ驚いている。

「気づいていたか。」

スヒルは何食わぬ顔で言った。

「ああ、俺の感覚をナメるなよ。」

実際は嗅覚と言いたかったが近くにはノベスがいる。

「ところでお前、任務はどうした？」

亮はふと思い出し、聞いてみた。

「任務？ああ、あれはお前たちの实力を見るためについた嘘だ。」

「じゃあ、最初からついてきてたってことか？」

今度はノベスが質問する。

「まあな。お前たちが危ない状況になったら、助太刀するつもりだったんだが。」

「危ない状況って何回かあったろ。」

現にルルは重傷だし……」

亮はそう思ったが、口には出さなかった。

「こんなところいても仕方ないから、俺たちも帰ろうぜ。」

『ああ。』

そして、三人は学校の前に移転した。

校門には担任が心配そうに立っていた。

「おお、お前たちは大丈夫だったか。」

担任が安心した顔で言う。

「心配するようなら、難しい任務をやらせるなよ!」

ノベスが多少キレ気味に言った。

「いやゝ。すまん。すまん。」

でも、お前達のチームにはスヒルがいたからなゝ。」

担任は頭を掻きながら、言った。

『それより、ルルの様態は?』

亮は心配で聞いてみた。ノベスも表情が一変して心配そうな顔になった。

「ああ、ルルは大丈夫だよ。まだ眠っているが傷は癒えたし後は目が覚めるのを待つだけだ。」

それを聞いて、二人は安堵の表情に変わった。

「医務室に寝ているから見舞いにでも行ってやれ。多分、ミリーもいるだろう。」

『はい。』

〃〃医務室〃〃

「ルル…」

ルルが寝ているベッドの傍でミリーが暗い顔をして呟いた。

「私にもっと魔法の知識があれば…」

ミリーは自分の拳を強く握りしめた。

コンコン

ガチャン

病室のドアがノックされ開いた。

ドアの奥から出てきたのは、亮とノベス、スヒルの三人だった。

『ルルの様子はどうか?』

亮、ノベスとスヒルが心配そうにミリーに聞いてみた。

ミリーは暗い顔を止め、いつもの明るい表情に戻した。

「ええ、まだ寝ているけど傷の方はだいぶ回復したわ。」

ミリーの話聞き亮はルルのベッドに近づいた。ルルは整った呼吸ですやすやと寝ている。

「私をもっと回復魔法を勉強していれば…
私のせいだわ。」

ミリーは暗い顔をして言った。

亮が何か言おうと口を開いた時、

「そんな事はないぜ。」

ミリーはこれまで一生懸命に頑張ってきたじゃないか。」

ノベスが久しぶりに真顔になり言った。

「それに回復魔法は昨日やったばかりなんだろう？ミリーはちゃんと習った事を実際に役立てたじゃないか。
だから、ミリーは悪くない。誰のせいでもないんだ。」

ノベスがミリーに熱弁した。

それから、暫く沈黙が訪れてミリーが口を開いた。

「…ノベスもたまには良いこと言ってくれるじゃないの。」

この時、ミリーの口は笑っていたが目には涙が溜まっていた。

「ありがとう。」

そしてミリーが付け足して小さく言うと、目に溜まっていた涙がこぼれ落ちた。

「あつ、ちよつ。」

泣くなよ。俺が泣かせたみたいじゃないか。」

ノベスはミリーの涙を見ると焦って言った。

「そうよ。ミリーには涙は似合わないわ。ミリーは笑顔が一番。」

聞き覚えのある声が聞こえた。

「そうそう、だから泣く…え!？」

ノベスは途中で口を閉ざし、四人は先ほどの声の発声元を見た。

四人の視線の先には、

ベッドから体を起こし微笑んでいるルルの姿があった。

「ルル!」

ミリーは泣くことを忘れ、笑顔で叫んだ。

「心配させて悪かったわね。」

「ううん。意識が戻って本当に良かった。」

ミリーの目から先ほどのとはまた別の涙が流れ落ちた。

ルルが目を覚ましてから五人で喜びの言葉を言い合った。医務の先生にこの事を伝えると、あと一日くらい入院したら状態によっては退院してもいいと言った。

それから、亮達は時ルルに励ましの言葉を言って医務室を後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7293e/>

黒き竜

2010年10月10日00時33分発行